神奈川県立歴史博物館
Kanagawa Prefectural Museum of Cultural History

論題	「松平造酒助江戸在勤日記―元治元年十月朔日より十一月十日―」
著者	根本佐智子・古宮雅明
掲載誌	神奈川県立博物館研究報告―人文科学―　第 44 号
ISSN	0910-9730
刊行年月	2018 年（平成 30 年）1 月
判型	A4（210mm × 297mm）

【資料紹介】

松平造酒助江戸在勤日記
―元治元年十月朔日より十一月十日―

根本佐智子
古宮雅明

【キーワード】
松平造酒助　庄内藩　元治年間　江戸市中取締　新徴組　天狗党

【要旨】
当館所蔵「松平造酒助江戸在勤日記」の翻刻。筆者松平造酒助は庄内藩士、家禄は千四百石。組頭や家中武器取扱掛をつとめた人物である。造酒助は元治元年八月より慶応元年八月まで江戸に在勤している。
本稿は元治元年十月朔日より同十一月十日まで、全五十綴のうち、「七」、「八」、「九」、「十」、「十一」、「十二」、「十三」を掲載した。庄内藩が担った市中取締の様子や、水戸天狗党が立て籠もった那珂湊の戦いなどの記事がある。
随所に入る挿絵は、那珂湊攻めの「見取図」のように激しく動きつつある世情を伝えるものから市井の女性の風俗を描いたものなど、興味が尽きない。

凡例

一、文字は原則として常用漢字を用いた。変体仮名はすべて平仮名としたが、例外として格助詞の江はへに改めた。
一、明らかな誤字・脱字は右傍に（　）で正しい字を示し、推定できるものは（　ヵ）とした。意味不明の場合は右傍に（ママ）を付した。
一、原文中の朱筆は「　」で示し、（朱筆）とした。また原文の虫損・破損・判読不能の箇所は字数を推定し、□または［　］等で示した。
一、原文中の抹消文字は基本的に掲載せず、訂正文字のみ掲載した。
一、平出・台頭は二字あけ、欠字は一字あけとした。
一、図の彩色部分には煩雑にならない範囲で註記を加えた。

書誌情報

「七」　一二五㎜×一七三㎜　小横帳　墨付五丁
「八」　一二四㎜×一七三㎜　小横帳　墨付六丁
「九」　一二四㎜×一七五㎜　小横帳　墨付八丁
「十」　二四九㎜×一七七㎜　竪帳　墨付八丁
「十一」　二四八㎜×一七四㎜　竪帳　墨付三丁
「十二」　二四八㎜×一七四㎜　竪帳　墨付二丁
「十三」　二四八㎜×一七三㎜　竪帳　墨付十五丁

【第七冊】
「（第七冊表紙）
七（朱書）

十月五日勝兵衛下ニ付
同十八日達候　」

」

十月朔日

先刻安吉親類とも明日罷下候趣ニ付颯と認上ル、秋冷と認候覚有之、今日冬と相成候得共庄内八九月頃同様、御殿出掛綿入ニて少寒む気味位ニて出仕、退候節ハ汗ニ相成候程暖気ニ御座候、今宵は一の日ニて御組集、地走ハ荒粉菓子ニ茶のみ、チャン始緩々噺いたし帰、其後又チャン無際限なし、夜中風之音余程有之、小用ニ起候処一圓曇、明日は大荒出仕ハ嘸難義之日ならんと考伏し候

同二日

天気よし、昨夜之模様ニては庄内抔ては速ニ大荒ニも可相成処晴天、都は格別なるもの御座候、昨日より冬ニ相成候故寒サ弥増候、火鉢無之ハ不済と半蔵へ申付ル、庄右衛門用事ニて参ル、例刻出仕、兵部殿呼出ニ付御用出候処、政之助不快之趣達　御聴、養生下被仰付候、即四日立之事申立、一組へも申達、文之助一趣下、内々看病下御座候、重吉差下候、今日大岡馬乗帰七之先生惣吉馬率来候趣ニ付引取、直隼人長屋へ参り為見馬如何成為ニや、毎度七ツ過参リもの也、隼人能馬と引替之下心ニ付、一趣馬場参候、今日も入有之、男四・政右・織人・多門・隼人・十兵衛兄弟弾之進・其外大勢集り、青毛三疋来ル、壱疋五十五両、星青一同能馬とて隼人・四郎右衛門少乗心見ル、四十両之青毛スナヲノ馬也、兵部殿乗、暮頃ニ相成漸見終ル、神田橋番所ニてあかりヲ付ル、下谷御長屋六ツ過帰、庄右衛門御用ニて呼出し候、今宵は早々伏し候

同三日

日本晴、寒サ難堪綿入二ツ重着し候、宗右衛門明四日出立いたし候間、早天ニ上ル申事故明過起、始末為合置候処、君袋斎兵衛昨夜呼出置候為ニ来ル、政之助云々ニ付一組罷帰候様ニと申達し候、是迄御常用ニて罷登居候者是迄之通ト口上相渋ル、渋谷宗兵衛早々下し呉候様ニと内頼ニ来ル、五ツ半過漸朝飯給居候処へ弁蔵来ル、申立聞なから食事いたし候、御役とは乍申甚世話敷事御座候、宗右衛門不参、例刻ニも相成候間出仕、今日都合次第下り被仰付候面々ハ、服部縫殿・服部八兵衛・渋谷宗兵衛・助川閑兵衛・服部敬之助、此敬ハ自ら為修行大坂へ参度内願ニ御座候、助川閑兵衛参ル、宗右衛門為暇乞参ル、文之助同様いつれ政之助一趣ニ下候積、先刻引取ニ政之助為暇乞参ル、六ツ過弁蔵御手廻一条ニて来ル、今日之御用済伏し候、四ツ頃ニも可有之や、チャン〃〃〃騒々敷事此頃は弥増し、家来とも上を下へと大騒、私起し参候者も有之候得共、寝候振りいたし居候得共、近と申ニ付障子明見候処、火之子夥敷燃上り、柳原当てなり、其内御組衆追々参り、柳原御屋敷近火ニ付参候趣ニて申付先へ遣し、其内筋違御門脇迄焼抔と申者も有之、柳橋とも申大混雑、其後庄右衛門参り、参候趣申聞候、柳原御屋敷気遣ひニ相成候ハ、為知候様申含遣候処、無間御屋敷近ニて心配候趣申遣候故、早速出懸候、大勢登合セ故一杯之人也、風無之ニ追々焼近相成候得共いたし方無之ニ付、藤弥長屋へ参り茶抔呑居候内、松山様より御人数被遣候、風段々廻り脇方焼行最早鎮火ニ相成候間、松山よりの人数返し候、私帰候九ツ半過ニも可有之候、大馬鹿騒いたし伏し候

同四日

曇、重吉出立之趣ニて寝込ニ被懸仕、目摺々暇乞いたし候、無間樋越郡兵衛遠近之事ニて来ル、其後庄右衛門来ル、無際限故食事いたし候、吉弥来ル、是も御役故申候へハ無拠候得共、三度食緩と給候事不相成、漸帰、四ツ過出仕、御用格別無之、今日下申達候人々ハ山下監物・加藤文内へ達し候、明日下ル者被召出有之候、武山勘右衛門・山岸嘉右衛門・安藤定右衛門・山下監物・服部縫殿・渋谷宗兵衛・服部八兵衛・加藤文内・田中久右衛門・野村織部御座候、此度御証代御供被仰付候面々へ拝借金半分被下置候事ニいたし候、御家老衆ハ六十両半分ニて三十両被下、私共ハ五十両半分二十五両、

御小姓頭は四十五両半金二十二両二歩、御番頭は三十両半金十五両、御物頭十八両九両被下、御列レ行以上は十三両之処六両二歩、並御家中嫡子二三男迄八両ツヽ、若党召連候者壱両二歩増、中間壱両増と定候故、御家中ハ四両、若党三歩、中間二歩之半金被下候事、御供被仰付候、勿論御供可被仰付御行列ニ結り(ママ)候銘々被下置、御留守と被仰付候者へ不被下候事相極り、今日手附者下者有之と申ニ、又此調何時帰候哉右儀(大カ)御座候、文内御長屋敷へ来ル、監物来ル、山下馬直作(段カ)タマサレ候とて大弱、皮はく事も不相成候間、何方へも向ヶ呉候様ニと頼候趣申聞候、何両位さし出候や不噺

一、明日勝兵衛罷下候趣ニ付、不用之分差下候

一、軽袴　一ツ

一、縮緬羽織　二ツ

一、時計ふんと(分銅)　二ツ

但シ時は藤弥下候節具足櫃へ誂候積(計脱カ)

右之品々差下候、此度ニて縮緬羽織は医者ならて不着、軽袴も不用ニ御座候、何廉甘物等も差上申候得共、段々下候者も大勢御座候間、其節考上申度、傳吉へ此方之鳶凧遣申度覆入いたし候、色々凧調集メ近々差下候、今宵御組世話役参度と申ニ付、参候様ニと申遣候間、伊三郎奉行頼候積、四ツ頃一同帰候、其後書状認封し候

【第七冊終】

【第八冊】

「(第八冊表紙)

「(朱書)八

十月七日大工金治出立同十九日着ニて

廿日達　」

十月五日

昨夜より雨天、雨之為ニや朝飯時食事いたし候、先ツ緩々いたし候、勝兵衛明六時参候申触なれとも遅く行音(信カ)□いたし候、私へ為暇乞昨夜御組之後出ル、勝兵衛顔見候事折ふしならて無之、十九日着翌日(衍)日より日々気根能他行、鱣食ひ、女之顔見吉原柳橋と出懸候間、半蔵へ被頼候十七両抔ハ早速渡候趣如塵ニ飛、御元〆役所よりも出貰候由、金持顔金つかうニ構なし、唯不締余家来ともの風儀ニも及可申、漸と(々カ)以之外なる者召連、宗右衛門へ噺いたし候処、私連レとて連候よふ申候へとも、半蔵と口説なから召連候、道中内を雨降候へハ腹痛、遅刻ニ相成候へハ足痛、能大宿なれは能女見候積ニて歩行、実ニ金持之見(カ)為申、ヶ様者ニ可有之候、此方地走極よく、鰯其外香物一ツ之節も有之、先ツ二度位汁有之、勝兵衛日々鱣食尤よふニ御座候、私は可相成倹約いたし、折ふし(ママ)鱣給候、腹合悪敷相成候事抔ハ無之、先ツ一ツ之地走ハ食事頃人ニ被掛仕早箸と歟、乍噺食事いたし候故甘物抔一切入不申、来春相成候ハヽ塩茄子二樽・糟漬大抵(ママ)ノかめニ西廻シニ被遣度候、訳山(沢カ)ニは及不申、例刻相成出仕、道風雨羅紗合羽ニて漸暖出候、今日は休足之御暇被召出、御用所同道いたし候、今日清兵衛休足御暇被下置、来二月出府候事被仰出候趣内々男四郎噺いたし候、兼て金井へ頼置候為御座候ニ付、祖母殿へ書状一通認、勘右衛門へ誂遣候、昼過引取榊原の長屋参り色々雑談いたし候、此頃襠高袴裏付一ツ頼置候分出来、日々往来着物之裾抔メッタニ相成候、木綿裾ニ無之ハ埒明申間敷、肌子半襟ヒヤ〳〵いたし候、能見候へハトロ〳〵いたし垢付、此垢付候事ハ朝ニ寒く候間綿入着し出仕、引取ニはあしく汗流候為ニ、常肌子不残とろ〳〵いたし候、半蔵出、又七郎殿御出又々御無心ニ付、兼て壱両も呉候様ニと御噺合書状有之ニ付、二両御無心候処へ、壱両壱歩遣候由申聞候ニ付、不返ともよし、呉切いたし候様申候やと聞候処、十五日頃迄是非返し被申聞」

候由、おかしき事ニ御座候、此方ニテ兎角柳橋へ出懸候由、金は如何繰合候者や不分候間、此後ハ断候様ニと申付置候、余り〳〵馬鹿〳〵敷いたし候ハヽ、下候方可然と考居候、夜食給候処へ権蔵我膳ニ付候ハヽ、大根酢漬ニ汁ハ紫蕨ヲ見候て、私今日道ニて大鯖ヲ見付、不被答整煮漬、甘事舌抜し申噺故、左様甘物有之候ハヽ、我へも送可申早速取遣候処、大サハ二切遣、庄内ニては見事不相成程大物也、風味至極よし、伊三郎・又右衛門呼遣候処早速参ル、三人へ此度笠・半被、郷夫へ貸付候分三十六人前用金ヲ御郡代為出為拵候処、御知行取之面々自分拵候事ニ相成　御進発御供御免被為蒙仰ニ付、御供候節被下金半分(ハン)被下候事ニ相成候間、上納等其□(外カ)家来共召連候者は二両増半分ニ相成一両ニ相成候ニ付、夫々家来へ為取方、其外夜中火事之節一組目印笹元ニ見分不残張為替候事工面為致、四ツ頃帰ル、早速伏し候

同六日

曇、伊三郎参候間凧之事相頼、明日御足軽下ニ付御誂荷物無之や申参候間、先達て為御登道中櫃へ不用品々入

一、鞍覆皮
　但此方ニて小振為拵出、金紋不相成候由
一、羅紗鞁タヲヒ(ヲヒ)
一、紅泥障紐
　但立派過、此方先ツハ真綿打流行、登候節持参候分ニて宜敷御座候
一、紅三具
　但三通有之候間差下候
一、幕一対手縄
一、はせん(馬氈)

持登候得共不用之拵形ニ付差下候、半蔵へ御注文之カハヲリ皮ニて立派ニ出来、皮不足ニて前輪へ掛候処タシ出来、私先ツ相用ひ度当冬又々御求、大ふり一枚為御登被下度候

一、三尺革
　但此度ニて申付候処立派出来ニ付為御登被下分差下候
一、五六鐙
一、従者黒半被
　但し箱楯(ママ)一件之節御拵候事故へロ〳〵いたし、とても長州迄為着候事不相成と申付、十一為拵候間差下候、廿五日之大廻り之節ニて二三ツ切れ候由御座候

右之分大混雑中ニて廿一日より段々思出次第申上、書付へ落候分此度ニて為拵候ニ付、不用物為拵候分有之、此度之義実変事ニて口外(後悔)先ニ不立と、二十五両抔ハ一鼻風ニて飛去ました、其外櫃中不用品々入候趣半蔵申聞候、甘物も少々上れと申付ル

　拵候品々之覚

一、従者小姓分小袴　五ツ
一、同上着小紋形筒袖　五ツ
　但道中追ては半纏なル
一、従者半被　十一
一、貸脇さし　一本
　但祐定三歩焼有
一、こさ蓑　五ツ
一、鞍覆皮　一ツ
　但金紋金縁り
一、三尺革三所紋　一ツ
一、敷込尾袋共　一ツ

一、中高　　一ツ
　中高不用事ニいたし候得共、萬一之節夜中一組纏候目印為拵候
一、槍之鞘　　一本
　但代槍之分
一、大小柄巻直し　二本
一、刀鞘引肌　　一本
一、ヤアケール（ヤーゲル銃）　一挺
　六匁、尤胴乱とも、尓今丸子出来之不申、十両余ニ可有之
例刻ニも相成候ニ付出仕、直ニ榊原長屋ニ参り立派之袴着替候、直ニ御殿ニ出ル、下面々葉書取次、日々私壱人其外ハ病気やら何やら出掛不申、八ツ半頃漸食事いたし帰、敬之助参ル、玄関ニて逢、膳出候処へ定右衛門九日に出立とて暇乞ニ参ル、挑灯貸し帰ル
今宵静也、下へ中恵参候多弁之音いたし候、明日二代孫次郎帰候由、先達て被仰下候御書之内、悉御返事ニ不及事侭可有之、とも弥上昇いたし候ニ付、田川入湯之事被仰下候、至極宜可有之と奉存候、御答不申上入恐候、母上様より町一番之味噌ニて鰹味噌御拵被下、至極甘御座候、干味噌は甘過、甘物も取不置、人々参候
節取寄候へハ、干味噌人ニ見付られ茶をけと相成候、勝栗も見付られ同様ニ御座候、内居候よふならハ甘物取せ置可申候得共、夜明ルヤ否人ニ被掛仕、例刻ニ相成候とて人々追、御殿ニてハ昼頃食事いたし候事無之、八ツ過一箸食し

候と人ニ被出、帰ルや否又々被仕掛、食事斗も緩と食し度存候得共、能々考候得ハ世話敷給候処ニて、甘物も不入、緩々食候よふニ相成候ハ、甘物取寄度心ニ可相成候間却て宜と考居候、又人之不参節は茶やら客之不参と同様、誰歟不参と待居候よふニ相成候
一、野州寄手追々引揚候、聞繕ニ被遣候面々尓今不帰
一、長州噺何ニも無御座候得共、此頃之噺ニハ長門百姓共騒立、趣意ハ乱国日本一同之為なれは無拠候事候へとも、外大平自国斗大乱、殿様も我共より先から居住と申事ニ無之、此度諸民敵は殿殿（ママ）也とて国中大乱也と申沙汰御座候、如何可有之や実事ハ不相分候
中恵も帰候音いたし、我も早々寝る、過宝（果報）待たんと手叩、床を延れとも御差図なさる、今宵風有之、クハタ〳〵ミチ〳〵〳〵天気雨模様也
　同七日
風不止天気よし、床中さむし、今日金治被下候由ニ付、御機嫌伺のみ奉申上候、私無事も一通奉申上候、幸便期候、以上
　十月七日　　造酒助
皆々様へ

【第八冊終】

【第九冊】（第九冊表紙）

「徒然余ニは筆を取無文字事々のみ認
御笑艸差上候
（朱書）
「九　十月十五日立同廿三日着ニテ廿四日達」

同七日

晴天寒風、今朝金治出立ニ付書状上ル、食事中権蔵・庄右衛門ニ被掛仕、隼人返り、定右衛門雁之地走いたし候積故、引取より参呉候様との案内ニ付、権蔵も参候積故、百疋位ニて一種為拵候様ニと申付ル、六兵衛来ル、弁蔵呼出し達し候、例刻出仕、御用ハ人々下書付也、引取兵部殿御長屋へ出ル、直ニ榊原へ参ル、定右衛門・権蔵来ル、定右衛門地走之由、雁汁・マクロ之さし身・ボラノさし身、榊原亭主出候一種ハさはの煮漬、私分ハ鮒煮漬、十腹いたし六ツ半過帰ル

同八日

晴天、今日は少々鼻気ニて引込居間片付ル、塵如山、縫殿為暇乞参ル、元吉来ル、金助用事有之来ル、昼頃御持筒只今出立とて参候得共、昨日も書状上候間荷物遅着可致を申上候、半蔵へ申付ル、三内参り長噺いたし帰ル

同九日

晴天、今日は鼻気もよろしく今日一日休足可致と床延置、閑兵衛暇乞ニ参ル、六右衛門参ル、権蔵来ル、ヶ様緩々いたし候事無之昼寝いたし候、万日も生延候心持、口うごかし候物は忠的振出し多葉粉と三度食、今日は昼も鰯・人参味噌注文いたし候処、夜食拵出候、惣吉塩梅者也、又々鰯、此節庄内ニは見候事不相成、きつと油有之甘く御座候間、能便塩振いたし下度と忠的へ噺いたし候処、風味損可申、おてつも今少寒く相成候ハヽ上可申、夜五ツ頃藤助只今水府より帰候間、逢申度旨申聞候間逢候処、諸家陣所申ニ不及、当五日合戦見候、官軍峰山ヲ乗取候、私共柳沢村出崎居見候所、折々実丸飛来り、前へ落候玉も有之、頭之上ヲ通候玉有之、味方即死五六人、怪我人有之由、峰山敵之死骸無之候得共、血は流れ居候由、楯山ニ惣大将武田公雲斎（耕雲斎）、湊村ニ兵糧貯、大将誰私忘タリ、ハンシヤろニモ大将居三ヶ所ニ屯、天下之変ヲ伺居候や、鎮り返て屯いたし居、此方より十

発打候へハ三発位ならて打出不申由、官軍惣大将田沼玄蕃頭とのハ水城居候処討手為控(カ)、田沼ヲ愁、此頃三四家自分ニて引揚、道々より被返候勢有之、藤助等面々田沼之家来と相成、陣々見廻候ニいつれも戦之心抔無之模様、夜討何討ニても敵方より被掛仕候ハヽ、惣敗軍ニ可相成候、鳥居家斗陣法も有之や、其外軍令抔申事有之間敷、酒盛いたし居体也、敵勢何位居候やとんと不分候由、此方の風聞とハ大相違之趣、楯山大寺有之、石塔ヲ畳楯といたし容易義ニ無之趣、必死之合戦不始ハ埒明申間敷、只今寄手木脇さし差居候勢ハ多く有之由、敵之慰ニ相成居候模様ニ御座候

同十日

曇、忠的今日一日御用心可被成と申三日休足、緩々いたし候、権蔵見舞ニ参ル、馬七大岡の惣吉先生へ参掛とて馬出来ル、御馬追々早みも行能相成候趣申、扨庄内より歩候為ニや、惣吉頼置候事不知為ニや、馬七へ為乗懸候て踏落有之候と、百二十里隔不思義タ事ヲ申遣タリ、始て乗大岡へ参候節五六度有之、其後二度其後又五度位有之、我乗候為とハ甚不分と申、我等も神田明神へ参候節無際限カツタツ〳〵とツマツキ、ヲカナ〳〵ニ乗候、此節ニ相成如何相成候や、又々乗行候て試ニ候へと申付ル、甚気詰り異国軍談記見ル、明末ト清トノ大戦也、其内本所通と向之火見ニて音いたし、チヤン〃〃馬クハタ〳〵ハエ〳〵〳〵と、別当は馬四足ハヲソシト走ル音世話敷事也、是ハ都と申印也

一、今日五十両半金二拾五両被下置候、別紙之通

同十一日

日々晴天、庄右衛門呼、昨日御礼勤呉候様ニと相頼候、今日は最早全快候得共此方上昇甚敷所ニて脉は尓今数也と申、安藤用作当御屋敷へ引移候とて来ル、十兵衛来ル、祥進(ママ)之趣ニ付昼飯豆腐為煮振舞、権蔵来ル、沢井永之助十六日出立之趣ニて来ル、兎角水戸攻場所何方ハ向候て可宜と申評儀ニ御座候、一同帰ル、今日御組一同へ御金被下置候、丹羽庄右衛門へ六両二歩、家来召連候者へ四両ツヽ、志賀萬右衛門と神田六右衛門家来召不連候間三両ツヽ被下置候、庄右衛門呼出申達候、今日中的漸一組之為ニ被仰付登候事ニ相成十二両被下、三人御扶持八月四日より積被仰付候とて甘物一箱さし出、中恵参り今度長州御供ニ付壱両二歩半金とて中恵も忠的も同様三歩ツヽ被下置候、大笑いたし候、多兵衛ハ壱両壱歩被下置候とて礼ニ出ル、近々一同地走可致と申候処、中恵福は内と申菓子差出し候、此菓子此頃進候荒粉之内ニ豆入候分也、其内とこ通り即チヤン〃〃〃チンシメリ也、女達は東都見候事不相成事故拠なかれとも、一日出腰より為見度也、障子建置候と向より豆炒りいたし候様ニカラリ〳〵〳〵〳〵と足早ニ歩行来ル音、又々能女参候やと障子開見候へハ、首白粉白壁のことし、格子ニ面ヲ付能見候へハ四五十婆々也、此方風体は尓今絵書れづ、前髪ハ二寸位切左右分少取候、髪ヲ乱候女ハ壱人も無之いつれも奇麗也、又は髪之いひよふ似たルも有之、しまたハいつれもおふ振ニて図模様なり、此節流行と可申や形は不宣候、美人折々有之、はひよ抔の返事、おまへさん抔との申音折々いたし候、先達て王子の扇子屋の女共の声ハ何ニを申や田舎者ニはとんと不分、此節芝居ニ朝七ツ少過より明六ツ過迄引も不切、カラ〳〵〳〵チャラリ〳〵〳〵出掛候事也、十

六歳位、帯紅も有之、大体ハ紫多く尤花織物又は昼夜

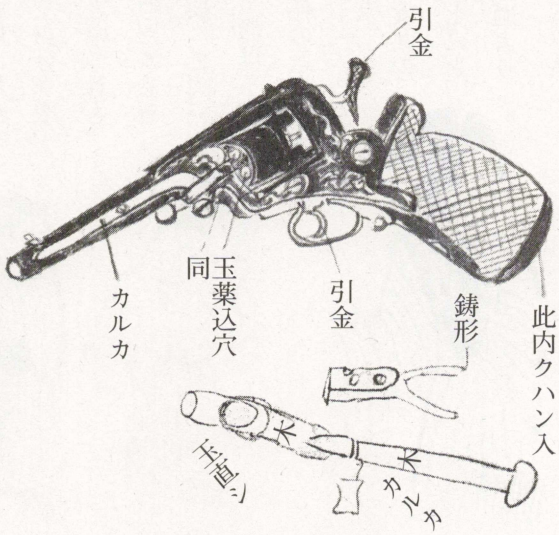
次の風女多く有之
能女は五六百人見候内漸壱
両人のみ、極美人は尓今不見

庄内之よふニ帯ノ下ニ〆候者は壱人不見、大股ニ遠足ニ歩行ニ自由能よふ帯上也、其代リニ帯より下ハブハ〳〵いたし候よふ也、いつれも縮緬多く着し糸織も有之、かんさしク、リ等ハ見当り不申、髪好敷奇麗也

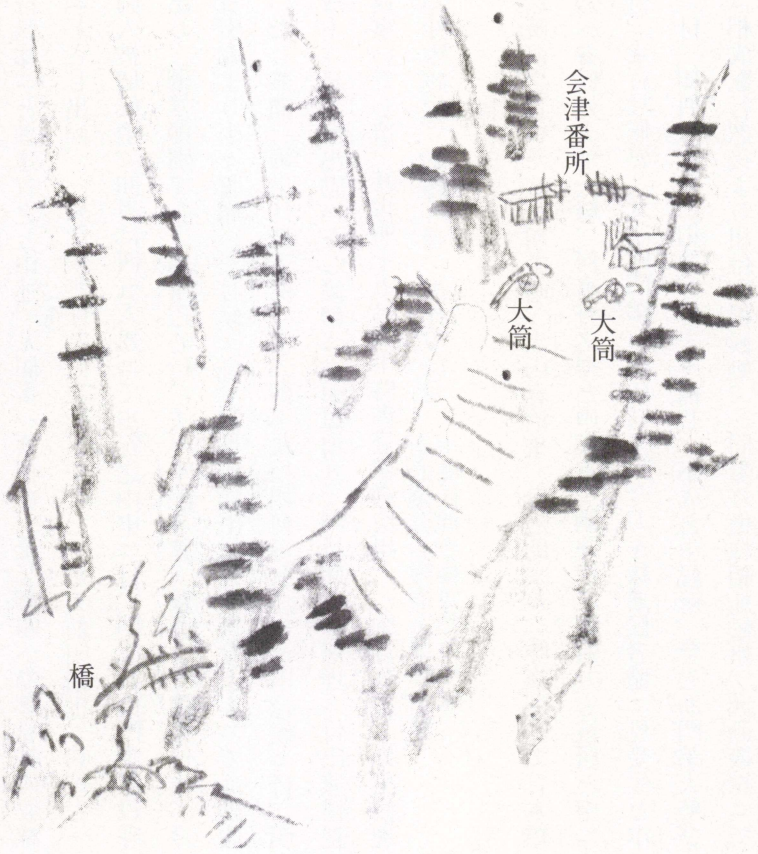
同十二日

天気よし、今日脉数は減し候趣中的申、気詰出勤いたし候へハ、日々往来なか〳〵大儀ニ御座候、此節藤弥壱人故昨日金助を以催促、相成丈早御出仕と申候得共大笑いたしやり候、主馬御金被下候御礼として兵部殿迄詰所ニ不出と藤弥殿御口説と、多兵衛噺承居候故、金助へ最早御下ニ可相成候間、御辛抱被成候間御出精ニて勤可被成候と申遣し候、実ニ困タ主馬也、和尚と申者は我儘ニて能工面斗いたし居候者也、此頃も権十郎殿と不出方ハ却て六ヶ敷無之宜敷と陰ニて噂いたし居候、早々役ヲ願候方可然ヲ、何之為ニ勤居候事や、小増(僧)共よりはハ不知と藤弥噺いたし居候、主馬は柳原之御物見へ住居候て、隠居同様ニ出仕も不致、終日物見より往来ヲ見居候と御家中衆色々噂いたし居候、此方ニて隙程とくハ無之様子、甘物ハ注文次第、其内ニ茶屋・甘物屋、女は御望次第、家毎ニシヤミセンチン〳〵〳〵、膽天外飛居候半、少間違ては亡レ国亡レ家亡レ身、馬抔ハ鼻カムヨリ安しき所也、若者ともを遣候ては親之懸念被察候処也、先頃助川弥惣右衛門・三浦熊(ママ)増御役御免被仰付、

能御政事直リシ候積申人御座候、其内大笑いたし候、同役ニは弘記と申騎将有之、夫差置如助川者ヲ勤退ヶ候とて人之心笑居候のみ、直候事抔思も不寄と申居候、此頃用事有之、兵部殿へ昼過より七ツ過迄居候て、弘記噺出候間前之通云々ニ付笑候、私よふた大馬鹿ホロケ者ハ困た世中と隼人と大笑いたし候、今日は朝より人々ニ被仕掛候、丸子おやじ噺ニ来ル、短筒之払物出候とて二挺持参也、此頃兵部殿求候二十五両之筒より一段宜敷、価二十壱両、二十両と申、誠工面之如ハ入驚候カラクリ也、一挺筒よりタン〳〵五発発出し候、段々承候処下直御座候間、先ツ懸御目候趣、御覧済ニは権十郎殿へも懸御目候と申、其内伊三郎凧整候とて持参也、其内源四郎・藤助来、段々此頃浪人若松へ押寄候とて、勢至堂峠ニて浪人二十人位大筒ニて打死サレ候由、右ニ付道中大混雑ニて御飛脚漸今日着と申



勢至堂ハ要害堅固地所ニて左右高山也、ケンノ如、山下ハ水戸領之為先達てより固人数若松より出張居候、浪人抔何方より押寄候ても皆殺と申地理御座候、何分此節柄弥之事ハ分不申



不残帰候後、先月廿五日立候飛脚当月二日立と一趣今日着之趣ニて、御状達有難奉拝見候、久振ニて達、別て勇候て開拝候、暮前より伊兵衛来、御膳出呉候様無心ニ付鰯塩振ニ豆腐汁、岡吉来り祖母殿より書状持参、岡吉陣羽織猩々緋ニて他(地)紋は黒羅紗ニて紋置直し候処、出来居候間直ニ遣候、多兵衛六ツ頃役所より帰、今日藤弥さん下被仰被成ました、御物頭去年より被登候方々御下、此度被登候六人内三内ともニ御差留、去年冬登之御備嫡子二三男百人御差下ニ相成候之趣申聞候、二三男下候事ニ付俄権蔵呼寺内従弟之事ニ付早速参り、従弟と申者芝田源十郎弟、此度ニ辛抱して居たひと内願候間、兼て頼入御座候間間(ママ)、明日早々書付さし出候様ニと申遣候

四ツ過迄居帰、其後書状書残置候処、大乱書ニ認、漸伏し候

同十三日

晴天、夜明よりおたけ猫やかましく目覚シ、友三郎へ状頼遣候、夜着より手ヲ出候ニ寒ク、庄内抔ハ大雪も降候半と考候様ニ御座候、毎暁の芝居見早クカツカラメカシモ感心也、金助下御人数之事ニて来ル、権蔵呼、昨夜挨拶承ル、庄右衛門来ル、今日上昇気も宜敷、月代剃可申と申付ル、長山健三郎下被仰付候事ニて大理屈ニて参ル、致(衍)大笑いたし候、伊三郎来ル、臼井兵助来ル、藤助来ル、下被仰付候事ニて大理屈始り、心在之者は願候て残ル、此一条は御家老衆藪から鉄炮の達様ニて奇妙々々ト可申、上昇之為引込居一寸遁大仕合少同席之方ニても前格崩候事始、其訳難筆紙尽、先達て二人衆登候節、無足之者を御組入ニいたし登候より崩始候、武者組古格之義ニては困事ニ御座候世中と釣合候と可申、清兵衛明日下とて参候、挨拶旁為暇乞菓子一ツ持参、岡吉事ヲ段々被申候、金八両仕舞置呉候様ニと被渡慥ニ預ル、即被帰、傳口を呉々頼申候、半蔵明朝参候様申付候、月代剃油ヲ引、一申合候事始り世話集相談最中、明十四日芝　御成被仰出候ニ付、御成街道忍固メ被致候様ニと権十郎殿為御沙汰藤弥より申越候、又世話集都合宜敷故、早々廻状出候様申達、先日のよふニ不都合有之候得共無仕方候間、萬事御留守居ニ問合、宜敷取斗候様ニと申含、甚安事申義也、四ツ過藤助・弁蔵来ル、申条々至極尤之義也、九ツ頃帰ル

同十四日

晴天、今暁下谷御人数　御成引も不切通足音ニて目ヲ覚し候、明過半蔵、清兵衛へ参候と申ニ付、作弥へ之書状認置候ニ付頼候へと申付ル、御成固は是迄無之、先日は御上屋敷へ詰候斗、雨ニて相止、今日無滞無事ニ為済度祈居候、庄内田舎者とも萬一被咎事抔懸念誠面白なき事ヲいたし候、半兵衛来ル、養達(ママ)為暇乞長話、権蔵　御成之趣ニて来、大安堵いたし候

明十五日御飛脚立ニ付奉差上候

十月十四日

【第九冊終】

【第十冊】

（第十冊表紙なし）

（朱書）「十」　（朱書）「十月廿日陶山便十一月五日着ニて六日達」

十月十四日

明日御飛脚立ニ付昼後漸出来神田橋へ遣候、今暁早起候為ニや誰も不参緩々昼寝いたし候、暮頃松平藤九郎明日立ニ付為暇乞参候得共、床中ニ居候間断不逢、夜食後周作話ニ参ル、多兵衛役所より帰申聞候は、藤弥殿より申上候様被仰付候、市谷御門牛込御門内外此頃物騒ニ付、廻方へ尚又心付候様ニと御達有之と申述、尤届書一通持参、是又御組へ為御見被成候様ニとさし出候、一見仕候処性（姓）名何歳誰家来十三ヶ処大創明細也、其後も一両人被切候由、曲者は四五人連ニて歩行之由申ニ付、即庄右衛門世話役呼出し、廻候節別て右之場所辺心付、夫々手配等達、藤弥より使来口上、今日引取より少々腹痛いたし候ニ付、明日快は出候得共只今よふニては出仕いたし兼間、御出仕被下度、乍去御不快模（様脱カ）如何可有之やと申越候ニ付、明後十六日ニは出勤いたし候積ニ御座候得共、明日此上は無理ニ付出兼候趣返事いたし遣、其後明十五日明半時御登城御戻掛　御目見（ママ）被　仰出候趣為知申越候、御組も帰、周作少居帰、中的藤弥へ附罷下度趣半蔵申聞候間至極可然と申候

同十五日

今暁滴之音いたし夜明頃晴、大山春治来、春之助来ル、昨夜廻ニて日本橋辺へ参候処大勢大騒、何事有之やと申候事、酒井様之御廻方も被居と申ニ付、走行見候処、登之助門弟五人居候て只今刀を抜通候者慥ニ見受候と申ニ付、如何可防やと相談ニ付夫々捕じハ不成と申候所、登之助門弟大勢ひニ相成駈行忽後より組付取揚候処、一同参り模様相糺候処、大酒機嫌ニて会津藩中　天子之御使□（者カ）抔ニ付、駕籠ニ入御上屋敷連行御座候事、稽古所ニ入置候様被申ニ付入来りと噺ニて大笑いたし候、藩士之体ニやと申候処、下白木綿稽古よふ物着し、上ニは帷子之紋付着し、大小抔ハチヤク〳〵拵ニて、足軽ニも可有之と申、色々噺いたし帰候、關甚兵衛明後日出立相成候ニ付、為暇乞来ル、中的樽柿三ツさし出、是を見れは庄内大宝寺柿も盛りは過候半と被考候、昼後より又々雨、秋松金三郎参候て此度野州聞繕ひ夫々骨折候ニ付、不存寄御裏御紋御小袖被下、並御酒御吸物被下置難有仕合ニ奉存候、右御礼ニ罷上り候とて樽柿五ツ持参也、此金三郎ハ御留守居下役ニて当時随一者ニての州（野）へ若衆被仰付罷越候節誠大心配いたし候、首尾能一同勤来りしも秋松之為也、参候節私夫々申含方もいたし候為ニ、其上権十郎殿一同被逢候節も取成いたし呉候為忝なひとも思候為故ならん

居間呼逢、道すから心配五日合戦走り之事申ニ付、弁も能面白聞居候処、藤助も御酒御吸物被下候より上下ニて直ニ来ル、是も同様之為御小袖一ツ御酒御吸物被下、色々御禄被成下有難仕合御礼とて居間参り、両人ニて色々困候事今は笑噺、藤助髪と楯六髪田舎風ニて余厚ク、見咎候て不成と剃落し之趣向、士之出立ニては咎られんと刀脇さし宿ニ置、尻たくり股引其辺より借候積ニいたし候処、臼井兵助太とり股引ニ用不立大ニ困候処、田沼玄蕃様より四半印被借（カサ）候時之嬉し敷ヲ不思皆々戴候由、四日迄聞繕

庄内大宝寺建柿ニは
不及〃〃〃〃

之事々五日朝ニ金三郎筆取ニて、藤助・又之進・兵助・藤蔵・楯六三ヶ所へ二人ツヽ分、聞繕いたし候処、書綴居候処へ柳沢ニて大合戦と申候て打合音雷之如し、其内ソラ〳〵戦と申内、又之進・兵助・楯六走り出候、後三人残居候故御用状金三郎へ宜敷おら両人は戦場へ行見候と被申候へとも、御用状後ニて可然、私もと又々三人追掛ヶ走り、柳沢之鼻ニ出候頃は兵ヶ野峯山押寄、両方より打合、味方〳〵〳〵ハと気へらし白眼詰候節、山上下と大烟黒揚、ハンシヤろニて狼烟を揚候処楯山ニてもあけ、使番ニも可有之騎馬武者往来際限なし、其内寄手凱哥揚否真黒ニ成山押掛、味方勝たよ〳〵と其辺居候人々申ニ付、尚又近見んと三人連ニて柳沢鼻下へ下り水車之処へ参候処、頭上クウーと大玉飛通り、七八間後土へさゝり込、又々飛来二三間前落候て土入、三十六ホント位ノ大玉也、其時御若衆之御顔ヲ見候ニ容子有気ニ付、是ハ年寄申事ならんと、扨皆々殿味方勝、峯山乗取候処御覧被成、後は用も無之、萬一玉ニ当り候てハ高名も不相成、夫より早々御用状取調上候方可然と進引返候、長話とても筆紙難尽、一体聞繕方先方ニては酒井様〳〵〳〵と申候て萬事無腹臓(蔵)不取包明細ニ聞、陣取模様陣先ニは大炮賦(配)り双打手常ニは土手筑穴堀、入城之容子敵方体不残聞候事全御威光故、市中御取締ニて公辺向申ニ不及、御町奉行・寺社御奉行へ私とも出候ても其通ニ能相成候処とん別ニ相成候、此頃神田明神神主借候事抔ハ寺社御奉行水野様へ私参候、段々願候処早速御承知是迄抔ハ大違、御威光ハ入恐候者ニ御座候と申、扨昨夜御廻先ニて御取押被成候会津ノ御家来、今日ニ相成会津は別段之事故内々ニて渡候方ニもと御沙汰ニ御座候得共、段々承候処［　］丁目蕎麦屋前ニて慥ニ抜払振廻候上は、町方役人其節即御町奉行届候者ニて、萬一内々ニて為済□相成□□御町奉行申ニ不及、御老衆始酒井ニて依怙取計ひと嘸々是ヶ彼言ひ可被申、折角御家通りも能相成候処、ヶ様之事ニて彼是被申候ては大変、いかに会津とて不被為済と早速御町奉行さし出候、可相成は市谷牛込辺悪徒何とかいたしやつ付申度、歩兵壱人被切候、市谷御門外ニて肩をたゝかれ候と思、八九町歩行宿ニ帰候処、肩八尺(寸)位被切六針縫候由、段々心付候て考候へハ、五人連ニて行逢候節拍かれ候と覚候由申事ニ御座候、私思候へハ、番町辺御旗本住家故旗本之二三男ニ可有之と色々打交セ之噺、徒然之余甚面白興有之、暮前帰、藤助色々存念申述、尤之訳故明日は是非出勤いたし夫々取極可申とて返し候、膳出ル、例之酢漬大根汁椀之蓋ヲ取見候処土鰍汁・焼麩と根木(葱)珍敷思給候処至極結構也、東都へ登始て気ニ合口(カ)叶候汁也と惣吉ヲ褒め候、権蔵・金弥噺ニ来り、一杯ツヽ振舞大悦也、権蔵今日廻先ニて匏瓜一ツ整候とて大自慢也、私庄内ニ品登候ハヽ整可申心掛候、第一匏瓜、第二鉄瓶、第三遠目鑑、是非求度心掛、先ツ此通匏瓜能形ニて皆大自慢大笑し候、雨も無際限降り両人も帰、我も寝らんと床延伏し候

同十六日

晴模様天気、例刻より少早めニ出仕、久振ニて出草臥候心持也、御用格別無之、昼後引取直ニ隼人長屋へ参ル、今日為見馬参候積之処、昼後より漸晴上り馬場不乾故、十九日参候事四郎右衛門申ニ付帰ル、藤助来ル、東六・弟二・権蔵来ル、六ツ過御組一同伊三郎御長屋へ打寄ニて、市谷牛込番町辺之悪徒打捕之評議之一件也、今宵は徒然ニ付韃靼勝敗記見なから伏し候

同十七日

晴天、例刻出仕、藤助道連ニ相成、冨士山白雪置絶景也、藤助申ハ昨日水戸城当節之大将朝比奈弥太郎出府いたし候ニ付、色々雑節(説)も有之、越後新発田溝口勢此頃加勢行敗北いたし候為ニ出候由、其為昨日権十郎殿御老中和泉守様へ被出候由、吉弥其為ニや別用やら明前より権十郎殿へ出候由、何事ニ候や、野州容易ならさる事抔色々噂して参候ぬ、藤助は御手廻廻り之先ニ立候為出、御内御玄関前御手廻不残詰居候、会釈いたし詰所ニ通り、今

日ハ水野同寮・水野儀兵衛・吉井・陶山・黒谷・竹内・松平面々青光寺(清光寺)御
参詣之御戻掛被召出有之、其外彼是下々御用有之処へ藤助出、只今承候処
非常詰御備人、饗応之間詰候面々永代向へ捕之為ニ罷越候て、壱人居不
申、非常詰壱人も不居候間、御手廻残し私は其場所参度旨申聞候、主立之
義ニも有之間参候様達、少過御用所出候間、今日御備御遣之義如何之為ニ
や、拙者ともハ今方詰とんと不知と申候処、権十郎殿昨夜和泉守様へ出候
処、永代向組屋敷へ筑破(波)山より忍居、千葉道三郎高弟ニて百人位之大将之
由、今壱人は水戸御目見医師二男、是も一方大将分之者、都合両人籠居候
ニ付生捕ニいたし候様ニとの御沙汰ニ付、非常詰より吉弥を添遣候趣被申
ニ付、左様□やと聞引、御用達居候処へ怪我いたし候人々も有之由人々噂
也、其内□田［　］出申［　］只今怪我人野沢寿三郎・長坂九郎治駕
籠入、私と長山健三郎と同道いたし帰候趣届ニ付御用所へ出申述、健三郎
ニ逢一通り承、長屋明居候処無之ニ付、先ツ稽古所ニ入置候様申付、御小
姓頭詰所へ参医者之事抔申候処、先ツ外科壱人も不居、そら〳〵医者と大
騒大混雑、其内稽古所寄付透見候者抔も有之、慮外之者抔も有之と申ニ
付、御小姓頭と示談早々御足軽抔出し制し、久嶌玄海ソラ中恵ヲ早やく呼
ニやれ、御隣家之小笠原辺ニ御無心可然と申内ニ、早追々手負駕籠ニて参
ル、小竹弁蔵・野沢寿三郎・北楯金之助深疵・吉弥いつれも駕籠、召捕者は
捕押候事不相成打果候由、吉弥は誠少之疵ニて権十郎殿長屋ニ休、其外不
残稽古所へ入、漸医者とも他所より走り来り、稽古ニ(所脱カ)白井弥五郎抔居候
処、俄ニ別所へ移し、五人入療治ニ取掛ル、其内御次より疵ヲ得候(ママ)性名且
疵明細ニ申上候様、其上幾人参候や、又何程之太刀数ニて仕留候様申上候
様被仰出候ニ付相糺候処、關寛介書付さし出、本書ハ大取込ニ認読不申ニ
付多兵衛ニ為認、左之通り

一、酒井吉弥　左足膝下横疵壱ヶ所壱寸斗弐針縫
一、小竹弁蔵　額竪疵一ヶ処弐寸位四針縫
一、長坂九郎治　額より眼下迄斜ニ二寸五六分位八針縫
右手指三本小疵付
一、野沢寿三郎　額上壱ヶ所二寸五六分位額上疵四針縫
右手竪疵五寸斗右手疵十一針縫
一、村上善作　頭上壱ヶ所三寸位七針縫
一、北楯金之助　頭上一ヶ所頭蓋骨ソゲトレ疵長五寸斗
左腕四寸斗、同手甲肉モケ取候十七針縫
右之通
一、踏込　十人
一、外固　八人
一、同　八人
右之通

手ニ余切付疵付ヶ覚

一、組留　北楯金之助
一、腰車切落　壱人　酒井吉弥
但切落ニは無之、大体切候由○吉弥組付其外切候由
一、胴切込　別人　小竹弁蔵
一、小鬢壱ヶ所　大久保健士
一、耳より歯掛一ヶ所　長坂九郎治
一、背中弐ヶ所　野沢寿三郎
一、耳より歯掛一ヶ所　村上善作
一、背中弐ヶ所　鱸　雄二
一、脇三ヶ所
一、首より肩先壱ヶ所
一、左之股下より同膝下迄筋違ニ切付ヶ
右之通

敵疵を得候面々へ御側を以御懇之御意、尚又大切ニ養生いたし候様ニと居所へ被遣候、其外参候者へは御稽古日ニ付於御稽古所ニ隼人問答ニて御直ニ大義御意有之候、諸節適々ニて不分、其内御用手負之為如山急用出、造酒助は初登り忙然(ママ)として閉口、村上善作甥村上弥惣治今日立、越ヶ谷泊之所組合より為看病引返呉候様ニと願出候、御家老衆始御小姓頭遠引候故、御家老衆へハ後断ニて可然と千住切手為認云々ニ付、早々引返候様ニと飛脚を立、其混乱難筆紙尽、とても同役所斗ニては不埒明、隼人月番故参リ相談之上其向々々へ達、其内小竹弁蔵下谷是迄詰居候御長屋へ引移度、尤駕籠舁四人申立、吉弥も柳原へ引移度候間、同様其内村上弥惣治・全(善)作手負候趣道中聞引返候趣届、左候へハ直ニ看病被仰付、荷物又石原次三郎へ其趣又々飛脚立、其内藤助場所より両人罪人存命候趣ニて、私・犬塚勝弥・秋松金三郎其御備十人為警固(衍)として南町奉行松平石見守様へ参り引移候趣申聞候、外書もの諸等之者町奉行之手先ニ相渡候、石見守様へ逢候処、此方手先ニては取候事不相成候ニ付御老中へ申上候処、早速被打捕感心いたし候と被仰候付、取押候積候処手向無余義切付候、尤手捕いたし被仰付候ニ付、生捕積ニいたし五六人手負いたし候旨申述候処、夫々は深疵ニ無之や、切殺候とも少も不苦と被申候、委細之義ハ秋松金三郎、権十郎殿へ直ニ上り申上候筈之趣申聞候ニ付、先ツ手負ノ面々へ手当之義早々可致、尤夫々申付置候得共最早暮頃ニも相成、手負は粥味噌汁、看病人等へハ御賄不被下ハ不成、其外不都合之事無遠慮申出候様申付ル、其内御馬乗帰、玄海尋ニ其処々々駈廻候て吉原へも参、漸朝より走セ只今連帰候と申頃は七ツ過也、村上事ニ付兵部殿へ走り行、先ツ少落付候処、野沢寿三郎同性(姓)野沢某長屋へ引移候度申聞候間勝手任候、他所医者丁寧後之事頼返し候、今宵伽は玄海・中恵申付ル、金之助は一宵通候ハヽ宜敷候得共、骨ケツレニて吐も有之、六ヶ敷模様之由大心配、尚又相糺候処先ツ宜敷模様と申ニ付さらハ後事ハ宜敷と隼人論(カ)し、兵部殿へ又々参り、手負容子且医者手配いたし候義一々申述、玄臨等悉皆取掛候ニ付、私ハ是より引と申述、直ニ手負居候稽古所へ為見舞して(衍)参候、其体入口より少入屏(風脱カ)建高枕いたし鉢巻白木綿ニていたし、第一深手之金之助段々糺候処夫々返事もいたし、折角大切いたし候様ニと看病人へも能々申付ル、又少行候処九郎治と善作と枕合高枕、いつれも白木綿鉢巻、三人とも白木綿血染額之処真赤也、善作背向医者脉考察最中、九郎治は夫々有難趣挨拶、格別案事候程ニ無之、大切ニ加養いたし候様ニと戻り、野沢寿三郎某長屋引移候そこへ参候て見候処、高枕白木綿之鉢巻同し平常同様之挨拶、稽古所より御長屋迄一町も可有之処歩行ニて参候由ニ付、無理いたし候ハヽ以之外故必々大切いたし候様ニと看病人十内某へ能々申付帰、直ニ吉弥へ寄逢尋、横ニ相成居色々御備之番繰合等改相談いたし、無理ニ無之様ニと申候て、同御屋敷へ引移候弁蔵へ参尋候処、高枕白木綿平常ニ不替、余勢過候趣看病人又之進・安倍平三郎・弁蔵弟・柏倉弟六申付、無理之義ハ一節(ママ)いたし間敷と能々申含、六ツ半過漸帰、空腹ニ相成候ニ付食事いたし、世話呼候処金弥・権蔵参り候ニ付、今日九郎治為看病親源之進御上屋敷へ今宵一宿いたし候様申付候、御門等之事ハ世話呼能よふニ申付候間、不構ともよく為申聞来候間、明朝書付出候様ニと申付ル、中的私不知御上屋(敷脱カ)ニて誰申付候や泊参候趣半蔵出申聞候、世話焼候得共草臥候気持ニ付伏し候

同十八日

晴天、白井預人来り、昨朝私も詰合ニて参り候、私ハ二番手ニて次之間四畳半へ控居候、参候節是非生捕いたし候積ニて、静ニ障子明捕押事ニ手配いたし入候処、雨戸建置、八畳間へ入候処見へ不申・居不申と申候処、誰やらイタ〳〵申や否屏風ヲ押倒乗押候処、脇より起出、合口之一尺三寸位之脇さし抜や否、片手ナクリニ金之助頭上ヲ切、金之助起上り組候処乍被

抱手働し、メツタナリニ孰此者ニ被切候、今壱人へハ吉弥組付、八畳へ敵
両人へ捕手十人誠烟艸ニフク呑位ニて済候、其血畳之上ヨフ〳〵いたし
候、手負不残駕籠へ入、御人数之内附添、死骸は存命候積ニて板よふ之物
のせ、石見守様固ニ付参候道内血タチ〳〵〳〵落候、尤何程かし隠忍候者
ニや雨戸建閣いたし、片隅ニ屏風建其内ニ居候、夜中伏候節ハ押入候や、
枕ハ着込いたし候模様、刀も入置候由、一同脇差ニて戦候、先ツ鉢巻金是
非入用故呉れ候様申付、余候品と違早々為拵可申、何分能よふニ為拵候様
申候処、神田明神辺とて早々参ル、紀太・平五郎来ル、安倍藤助来ル、例
刻出仕、御用も色々有之、三御屋敷手負人いつれも快趣大安堵旨申述、兵
部殿出候様被呼候間出候処　松平造酒助　急来御人数繰出候節之御用取
調掛被仰付候、子十月　畏候趣御請申、御小姓頭吹聴ニ参ル、政右衛門兼
て被仰付置候ニ付相談いたし候ハ、六ヶ敷事も有之間敷候、御用済候ニ付榊
原へ寄相談等いたし、七ツ過ニ帰、藤助昨日之御届書品物書付両通さし出

水戸殿家来
千葉道三郎元内弟子
真田帆之助
水戸殿御目見医師
岩名昌山久離悴之由
岩名昌之進

（朱書）
「南町奉行松平石見守様へ差出候届書」
右之もの昨夜水野和泉守様より依御差図家来とも差出、御軍鑑（ママ）奉行支配深
川新田嶋組屋敷水主同心御船蔵番小林平助方ニ忍居候ニ付、踏込捕押懸候
処、抜刀を以飛懸り手向致候ニ付、無餘義両人共深手為負、唯今捕押召連
申候、此段申上候、以上
十月十七日
酒井左衛門尉内
酒井吉弥

真田帆之助雑物
一、大小壱通　一、金三両　一、鏡一守　一、胴巻三ツ　一、竹の子笠
岩名昌之進
一、大小壱通り
両人之雑物
一、錦之袋　一、印形　一、財布　一、書付類　一、真鍮物
長州筑破往来書状
一、鍔二ツ　一、着込二ツ　一、忍頭巾　一、羽織一ツ　一、紙入壱ツ
一、頭巾　一、烟草入二ツ　一、金子壱両一分　一、風呂敷二ツ
一、弓張挑（堤）灯　一、脇指引肌
右之通りニ御座候
十月十七日

明日公辺□　君へ指上候ニ付其下書也、三内暮過より御用ニて参り、六ツ
過帰、色々認物いたし伏し候

（抹消）
「　同十九日
晴天、寒気思止床中ニて認物等いたし候、今日御人数調之為早仕ル出、
色々御用も有之、秋松金三郎只今公義之同心参候て、別紙さし□申聞候
昌之進弟
岩名智恥三郎
子十九才
右之者儀も真田帆之助并兄岩名昌之進一同御府内へ忍出候もの之由、浅
草辺立廻候やニ付、住所突留召捕可申積、尤頭へはいまた不申上候事
十月と認書付持参ニ付、又騒始早速取捕方御物頭へ申付、足軽棒達者十

人御備組藤助呼出、夫々差図いたし非常詰都丸嘉内組合八人、此度は和泉様是非生捕申度、無□らハ徒不知候間召捕申度□被仰越候ニ付「」申含□不申様ニ藤助先立七ツ前差加、吉弥今日御刀被下置候」

同十九日

晴天寒サ難堪、床中より出ルニ思止、今日御人数調之為早出仕、兵部殿へ参直御殿ニ出ル、御用ハ手負之雑用之下御用、八ツ頃ニも可有之や、肩衣掛悪敷役人参リ、私とも後之御座敷間通ル、毎度御客之来ル処也、秋松金三郎挨拶ニ出居御用へ出戻りニ、急御用と金三郎申ハ、只今御同心被参、別紙口上書さし出、暮ニ相成候ては不相済、早々御人数さし出呉候様ニと申と申聞候間、相成丈早々と申ニ付、私今日は急御用始てニ付、驚一見いたし候処

昌之進弟
山名智恥(ママ)三郎
子十九歳

右之者儀も真田帆之助并兄岩名昌之進一同御府内へ忍出候者之由、浅草辺立廻候やニ付住所突留召捕可申積、尤頭へはいまた不申立事と有之ニ付、直ニ権十郎殿差出、五人位もさし出可申やと伺候処、一組合十人位故非常詰より被差出、此度は切捨可然と被申ニ付、主立勤藤助呼出候処、何分手負之面々之為ニいつ方参居候や為尋候得共不知、大混雑無拠世話参候様饗応之間へ申遣候処、黒川鷹次郎参候間今日之先一組合何人ニ候やと承候処、八人ニて世話役都丸嘉内之趣申聞候ニ付、ヶ様々々と申候処是非参度趣申聞候得共、一ノ組被遣と申候処色々ニも申聞候得共、苦々敷無餘義承服いたし候処へ藤助漸来ルニ付、ヶ様ニて先刻より心」同先立いたし待居候間、早々支度いたし参候様申付ル、此度早々切殺候様ニと申達候処、金三郎ソレハ御延引、和泉守是非とも生捕白状之上同類御聞被遊度御趣意故、此度はなんても生捕候様ニと御同心被申旨強て申聞候処、織人も取押申度いつれ棒攻ニ為致方可然候間、御足軽十人被仰付候方と心付呉候故、御用所ニ出□□申述候処可然と被申聞候間、御物頭平林甚五兵衛呼出申達、御足軽他行成とて不集、藤助なんても取押候様申付候処、支度いたし候とて引、金三郎申ハ余り行々敷参候ては不相済候故、忍候て吉原会所ニて示談之上手配いたし候積、七ツ頃支度出来出ル、足軽は後より走ル、御用所出候処、拝領物有之ニ付、吉弥呼出候間其同道いたし候様被申聞候、今日漸手負親類又は心安し者三人ツヽ看病被仰付候、九人へ手紙ニて申遣候、今日は為見馬参候積ニ付引取らし、直ニ隼人御長屋ニ参り今般十兵衛・健二郎召捕者一見走り行、其内参候趣申ニ付馬場ニ参り候処、馬七疋参ル、其内吉弥名代丹羽庄右衛門来ル、直ニ権十郎殿へ同道いたし候処

吉弥別紙之通り

酒井吉弥

一昨十七日水野和泉守様より御沙汰ニ付、浪人真田帆之助・岩名昌之進と申もの深川新田嶋水主同心御蔵番小林平助へ潜伏罷在候を為召捕、御家中召連罷越、指揮方格別骨折候段達　尊聴、一段　思召　御意之上白鞘御刀一腰被下置候

右之問合いたし候処、別紙被相渡候

右は一昨十七日水野和泉守より御沙汰ニ付　小竹弁蔵・長坂九郎治

浪人真田帆之助・岩名昌之進と申もの深川新田嶋組水主同心御船蔵番小林平助方へ潜伏罷在候を為召捕相向ひ、処々手疵をも得、格別相働候段達　尊聴、一段ニ　思召、為御称誉生涯三人御扶持宛被下置、尤是迄之通嫡子ニて御奉公申上候様被仰付候

北楯金之助

右は前同断ニて為召捕相向ひ、処々手疵をも得、抜群相働候段達　尊

聴、一段ニ　思召、為御称誉被召出、五人御扶持方被下置候

野沢寿三郎・村上善作

右は前同断ニ付格別相働候段達　尊聴、一段ニ　思召、為御称誉被召出、三人御扶持方宛被下置候

御小袖一ツ、

大久保健士・石沢栄三郎

右は前同断之節相働候段達　尊聴　御意之上被下置候

同

加々山新十郎・犬塚勝弥

右同断之節世話役心得方宜敷趣達　尊聴　御意之上被下置候

夫々役人共へ申付、不残隼人殿長屋出候様切紙を以申達候様申付、又馬場ニ参り今日ハ能馬無之ニ付隼人・男四郎・多門・元右衛門と戻り、私ハ隼人御長屋乍世話参り、色々地走ニ相成、其内十兵衛・健三郎帰り来、下谷萱(金)杉通ニて取押候、御足軽遅遠ニ相成、御備組八人通候処、同心向より来候趣申、如何ニも向より笠冠、割羽織、尤大小さし、襠高袴着、手風呂敷包持来、行違と無間生捕、一同為警固として一同御町奉行へ参リ申述候積ニて一趣ニ町参候趣、藤助より申越候間、多兵衛を以両人衆へ生捕難レ無之趣多兵衛を以申遣候、御称誉隼人於御長屋ニ達候面々村上善作・加々山新十郎・長坂九郎治・北楯金之助・野沢寿三郎・石沢栄三郎、夫より下谷ニ帰、五ツ半過小竹弁蔵・大久保健士・犬塚勝矢へ申達、漸八ツ頃迄認

此控は書候侭嘸々不文落字読申間敷候、寝なから認候、皆々殿御達者恐悦候也

【第十冊終】

【第十一冊】

（第十一冊表紙なし）

（朱書）「十一」

（朱書）「十月廿五日中的下ニ付十一月十一日達」

十月廿日

今朝臣兵衛立へ控上ル、権蔵来ル、都丸嘉内来ル、源之進来ル、出仕御用有之、藤助出、昨日被仰付下谷金杉上町ニて同心只今向より参候趣申ニ付見候処、竹の子深笠ニ紋ニ繻高袴大山(大小カ)さし、手ニ風呂敷を携来候ニ付、行違手ヲ捻り、六人ニて会所ニて足軽ともへ渡、縄掛一同警固いたし一通相糺し智恥三郎と申ニ付、直御町奉行連行相渡、八ツ時頃帰候、其節届面(書脱カ)と相糺候口上書一体捕押模様委細書付ニいたし御用所へ出し、八ツ半過引取、吉弥祝義旁参リ帰、金助来、夜食後藤助・庄右衛門・儀右衛門・東六・六兵衛来ル、雨音いたし、四ツ前帰候

同廿一日

天気よし、藤助来ル、健三郎来ル、例刻出仕、御用有之、御用所被引隼人御長屋参り夫々達、七ツ半引取、食事後源四郎・藤助来ル、五ツ過帰

同廿二日

晴天、権蔵・庄右衛門・伊三郎・弟二来ル、中村文蔵・佐藤又之進来ル、例刻過出仕、御用色々證文如山、此造酒助閉口〳〵〳〵、此度手負之面々へ公辺より銀五十枚被下置、吉弥名代権十郎殿御長屋へ七ツ半頃同道、銀三枚被下置候、小竹弁蔵へ七枚被下置候、北楯金之助・村上善作・野沢寿三郎・長坂九郎治へ十枚ツヽ、被下置申達、御礼父子惣廻勤親類御礼有之、政右衛門へ調御用ニて参候積ニて約束いたし候得共、暮頃ニも相成候間鳥渡参り断、詰所へ又々戻、抜書等相渡帰、又蔵呼出内談いたし候、秀策明日立候処差留候、御用繁は御察可被下候、百人余下候ハヽ如何程嬉し敷可有之や溜息のみ、御組寄合ニて庄右衛門・権蔵・儀右衛門・東六・権三郎・金弥・源太夫参ル、土田秀策・弁蔵名代永原久蔵呼出参ル、四ツ前帰ル、床ニ入候処出火チヤンとこ通之音いたし、夜中物見前馬数疋通音いたし候

明七ツ頃チヤンチヤン
〃〃〃ホンニ風餘程
有之、本所通り馬クハ
タ〳〵〳〵〳〵〳〵
舎人屋ハーエアーエコ
リヤ

同十二日（廿三日）

晴天、例刻出仕、御用如
昨日、今日ニて二日昼
弁当不被給、八ツ過榊
原長屋ニて御用達、隼
人所ニて塩引茶出候故
割合開、御状達、明日御
飛脚ニ付鳥渡一筆無事
のみ申上候、暮過帰、調
御用有之、明達候事ニ
て極急ニ相成、手伝人庄右衛門・東六・又右衛門、其内権十郎殿より此頃
山名智恥三郎（ママ）召捕参候足軽幾人誰組と申、早々調可被申聞と申来、五ツ頃
御上屋敷返事遣、取調九ツ過迄ニ出来、順策書状颯返事認、七ツ半迄認物
いたし候、チヤン〃〃見不申寝

同十四日（廿四日）

晴天、霜、寒さ甚敷事也、寺内権蔵・三好金弥・紀太平五郎参ル、例刻過
出仕、日々御用如山、庄内抔ニは無之事ハ竹内組祢津郷右衛門呼出手伝為
致、認物為致、川内庄五郎御用ニて出候間読合物手伝、土屋順吉同中村又
三郎ハ御用ニ出候間證文之添判押、尤私姓名認、其内朝比奈十右衛門出候

間、又々留候て五十人御備組へ廻状ニ通為認、賑々敷大笑、右之仕合故暮
前迄割合不被給、漸引、藤弥為暇乞鳥渡参ル、六ツ過帰、空腹甚敷早速膳
出しカキノコトクニ食付、土鰍汁のみ誠結構至極、庄内ニて鮭之あんかけ
抔ハ及も不来、此方ニては源四郎噂聞なから食事いたし候も同様、此繁用
ハ実ニ独笑いたし居候より外無之奇妙〳〵、嘸明日廿五日立有之、兼て整
置候此方張凧追々かひ集メ候積所、此大混雑ニて箱内大透なれとも無詮方
空ニいたし差下候、時計ハ藤弥足」具櫃へ誂候、来月ニは御家中之武器御
差下故、其節菓子茶其外浅艸のり・ミかん上可申候、枝柿出候ハヾ是も上
度と存居候、御人数下候ハヽ寛々可致、此方ハ先ツ御静謐と可申や、召捕
者計、の（野）州十七日より三日続寄手敗北いたし候由、京都之方はとんと沙汰
も無之処、今日金三郎と申御留守居方之者申聞候ハヽ、一橋様へ附居候者
之内水戸天狗方二三百人有之、何廉模様有之由、小声成物語いたし候、且
昨日権十郎殿西之丸ニ被出候ニ付物有気也、今日々々無事悦居候、藤助・
周作暮頃より来ル、五ツ過帰、鱸半輔・杉山甚内呼出来ル、御用達し遣
候、二包達

一、箱入鞘巻　追金之義も委細被仰下奉畏候　外ニ鰾文一趣ニ入ル

一、大紋麻小袴　一、図鑑　一、干味噌

右之品々無相違相達候

今晩は四ツ頃より静ニ相成候ニ付、昨日相達候御書緩々拝見仕候

一、（ママ）一、十月一日御飛脚着、大殿様御拳之小兎五羽御頂戴被遊、御構へ御出
席、白井へ御出被遊候由、一、佐藤孫九郎書状達候事、三日目届候由、
フラ男ニては困者ニ御座候

一、中村貫蔵支配御頼（カ）被遊候由挨拶状之義奉畏候

一、神谷徳右衛門折々上候由、悴殿ハ閉口仕候　一、轡之事四口有之候間
潤沢ニ御座候

一、（ママ）御状御上屋敷中ノ口ヨリ差出候由、閑兵衛へ御誂御状之由、余麁抹之事ニ御座候、先達て弥五右衛門を兵部殿ニ呼為登候積ニ申遣候処、右近さまの御働ニて助川席上とて為御登、此方ニては閉口、武者組の欠ニ出候より外工面は無之、役にハ不立、唯太刀取武者也

一、馬之事委細被仰下奉畏候、先ツ心当りも無之、南部馬をねラヒ居候、無限ク見候得共、是と申馬壱疋見不申、私見候内の一番能馬、大岡□之馬乗雋七の先生、惣吉乗下六歳ニて青毛額ニ白星有之、直段五十五両、先達ても申上候馬ニ御座候、隼人至極求度相成三十両ニ付候得共相談ニは不相成、此頃少増金いたし掛合候由、其後聞不申、三春出候馬足ニ添節有之、榊原此度ハ外物好相止是非求候心ニ御座候、私ハ辛抱いたし極能駿馬求候積、先達申上候岩五郎求候四十五両之水青南部産之由、此間鉄炮音ヲ聞平身、小路より出候鰯売ヲ二三間為飛候由、柿売同大槌五六ツ、柿一杯入置候へ突掛、馬少痛ミ候や、漸留候由、夫ニ付無臆馬之引替模様由、此頃岩五郎噺多々有之、別て吟味仕度事義ニも存居候

一、助川より誂候茶相達、白井へも御配分之由、祖母さんも棚より落候御鼠之よふニなられん候半と御察申居候

一、十一月晦日前差上候茶之事奉畏候

一、梅浦相湯ニて帰湯至極よろしく御座候

一、順策之云々委細奉畏候（カ）

一、御留守中之　下屋敷御入、半蔵も不居嘸々御心配之程奉入恐候、川鱸鱣嘸々御賞翫被遊候半と奉遠察候

一、御母上様より御状有難拝し奉候、源吾下着委細申上候由、傳吉へ凧絵少々差下歓候由、凧絵買ひ参候日無之、近々緩々訳山（沢山）求度心組御座候

一、干味噌被遣、其外為御登品々慥ニ相達候、干味噌尓今訳山故申上候迄

御延引可被下候

一、福井へ申遣候品々ハ不用ニ付為御登及不申、折々市中廻もいたし候積故泥坊頭巾ハ御登セ可被下候、裏破候様覚居候間取替直し可被下度候、日々切れ候着服ハ上着之裾ニ御座候、庄内足袋十日も用候へハ破申候、此方之足袋ハ大丈夫御座候、最早昨夜疲ニや寝相成候間、追て委細可申上候

明日中的・藤矢（弥）附罷下候ニ付奉申上候、寒気折角御厭可被遊候、時気（期）御機嫌伺のみ奉申上候、尚奉期幸便之時候、以上

十月廿四日夜四ツ過認　　松平造酒助

御父上様

御母上様

尚々乍恐私無事趣皆々へも宜奉願候、以上

【第十一冊終】

【第十二冊】

（第十二冊表紙なし）

「（朱書）十二」　「（朱書）十一」月朔日吉弥下ニ付同人廿日着廿一日達」

十月廿五日

風雨雷鳴一声、中的暇乞ニ出ル、控持下候様ニと申、金壱両為取ル、今朝凧入箱才領ニ頼、壱〆（貫）余なりとて半蔵おぼける、山本権蔵来ル、例刻出仕、七十余之面々へ御酒御吸物被下置候、御用所へ出候処下候面々へ御称誉御金三百疋ツヽ被下置候、世話役へ其外ニ三百疋ツヽ、都合壱両一歩（分）ツヽ被下、皆勤之面々へハ金打提緒一組ツヽ、被下置候、俄取調一同被下、其賑々敷事大取込難レ尽二筆紙一、一同へ達、八ツ半過漸致食事、兵部殿御長屋へ出御用達七ツ半過暮々帰、食事後権蔵来、十兵衛・源太夫は廻方調被仰付居候ニ付、内々申越候は明廿六日　御老中御連名御奉書御至来、五ツ半時御登　城と被為蒙仰候ニ付、明六ツ半時早メ御登　城ニ付忍御供不

都合之事出来候趣ニ付、御組より御供出呉候様申越候ニ付、俄大騒世話呼相談いたし候得共不知、権蔵・久蔵御上屋敷遣、其後又之進・正五郎・岡吉来ル、川内正五郎ハ昨夜吉原より注進ニ付参り候ニ付、十七人ニて参候て夫々手配方噺いたし大笑し候、御同心先達て之由、罪人ハ吉原寄(カ)ニて新造芸者呼、酒呑居候由、段々手廻し御人数着流し顔包脇さし斗ニて手引女ニ引やら被引ルヤラ大問答いたし、敵ニ油断為致居候内、御組人々廻り被通候得共、為知候ハヽ大勢ニ成候ては敵ニ被覚候半と不知振ニてたわむれ居候、九ツ過ニ都合能と申案内ニて御詫意と申処ニて、かむろ新造之類ハ散乱いたし、組付候処鼻血ニても出候やと存候処、フヘヲ払相果候、短刀四寸三分位、誠少之内懐中抜身入置候ニ無相違由、一同きもけし候由、早速釣台ニのせ北町奉行ニさし出候由、例之通一同警固之為故玄関へ刀抜行上候由、御町奉行被逢感心之趣丁寧ニ被申由、御手付衆も能働候為と田舎人口ニて称口いたし候処、御同心とも帰ニ一段丁寧之由、今日町御奉行初て被逢候由、刀を抜町御奉行玄関ニ持上候事ハ田舎人之為先ニは不知故持出、只今ハ仕来りと相成候由、酒井之勢ひハおろしく(おそろしくカ)事相成候、権蔵等帰り、先時日之処御備組ニて御供いたし候由ニ付一同帰

同廿六日

晴天、角之助廿八日下候趣也、例刻出仕、御用程承候得共、御老中之御手調ニてとんと不知レ、殊寄四品ニ候ハヽ熨斗目故、御用意可然御小姓頭被申、下谷迄半道も有之、若早速御戻り相成候ハヽ困候義即可申遣候、主馬も今日は出仕之趣ニ付早々申遣し候、其後男四郎より御紋付熨斗目用意之為とて厚意遣、主馬へ申遣使行違出仕、黒川より借候由、八ツ過頃戻、私分熨斗目参候得共、御留詰被為蒙仰付、着用不致済候、誠御内意奉恐悦候事也、暮頃引取御組打寄四ツ過帰ル、丑刻過ニ隼人より紙面ニて御預人中村常右衛門・大森濱治明廿七日池田播磨様南町御奉行へ差出候様申来候ニ付、

途中

夫々警固人御差出と申越候ニ付、俄ニ石原源四郎呼出、一組召連警固いたし候様申遣、其外警固人四人申付、出納役へも夫々夜中申達、藤助・金弥来ル、遅済皆々帰伏候

同廿七日

晴天、大霜真白、寒き事綿入ニツ綿入羽織ニて不被絶(耐)、金弥・萬右衛門・六右衛門・弟二来、今日は昨日被仰出面席達ニ付呼出し候、〇昨日之被為蒙仰云々書付同役衆へさし遣可申処不心付大忘、多兵衛は何ニもかも忘居候て、私よふニ行不届者ハ困事ニ御座候、乍去御役願程より大キ事ハ有之間敷と存居候、少シ馬鹿た事有之ニ付、半蔵を以誤事申候得共不構置候、全私不行届、手附ニ御用を掛置候為と存候得共、やゝもすれは額筋立申候、例刻出仕、今日は御用も無之候得共、添状抔は庄内之極御用有之程ニ〇△(欄外)〇引取織人へ参り少御用達、直ニ榊原参ル御座候、七ツ前より隼人へ参ル、吉弥も来ル、膳出ル、さし身・土鰍汁・長皿モンジロ小串・カマボコ・猩々芋・大根・魚身・大蓋物鳥余油在過・時鮭、大食いたし帰、明日清光寺御出忍御供云々ニ付川内正五郎・庄右衛門・儀右衛門呼達、四ツ頃床延、チヤンチンチヤンチン小石川通馬クハタ〳〵〳〵ハエヘ〳〵〳〵世話敷事ハ奇妙チヤ〳〵〳〵

同廿八日

晴天、藤助来ル、朝飯出し、今日御参詣相止、伊三郎来ル、春之助来ル、吉弥へ用事有之柳原へ参ル、藤弥是迄居候御長屋ニも参ル、三内と半蔵ヲ為見畳替等夫々御普請方役人へ申付ル、夫より出仕、御用追々透、提紐認ニ参らんと三内と一趣八ツ頃引取、大通店々ニ寄、繁栄目驚(驚)し、直段高直おそるへし〳〵〳〵、能品柄壱ツもなし、相止又々柳原へ立寄、三内御長屋へ立寄、三内物好も感心也、異人之金入出候間、開かんと色々工面いたし候得共開候事不相成閉口、三内即開候、其工面入警候、暮々帰ル、廻方候ニ付庄右衛門・権蔵・東六・久蔵・御備組壱人呼出達、四ツ頃迄居帰、

床為延伏し候、廻方調掛候事不相成、御用も透ニ相成候間、明日は引込調物いたし度、主馬は日々他行いたし御殿ニ不出、今日御用所ニて大笑いたし候、困た先生也

同廿九日

快晴、引込朝より取調物いたし候、藤助・弁蔵は今日出勤之趣ニて来ル、健三郎暇乞参り、十兵衛・庄右衛門・藤蔵・吉弥来ル、(野)の州返忠有之、散乱いたし四百人位奥州方へ走り候由、残党少々居候由、八百人位降人ニ相成候由、其外固、又々金之入用ハ上々様御登之事如何可相成や、此方色々趣向付ヶ居候、夜食事中又々藤助来ル、帰候後権蔵・岡吉夜噺ニ来ル、色々申上度事有之候得共、日々亭主茶屋同様ニて書度事も無筆者御察成可被下候、先々寒気御厭可被成候、今夜も出火、先々無事申上候、夜九ツ頃

【第十二冊終】

【第十三冊】

(第十三冊表紙なし)

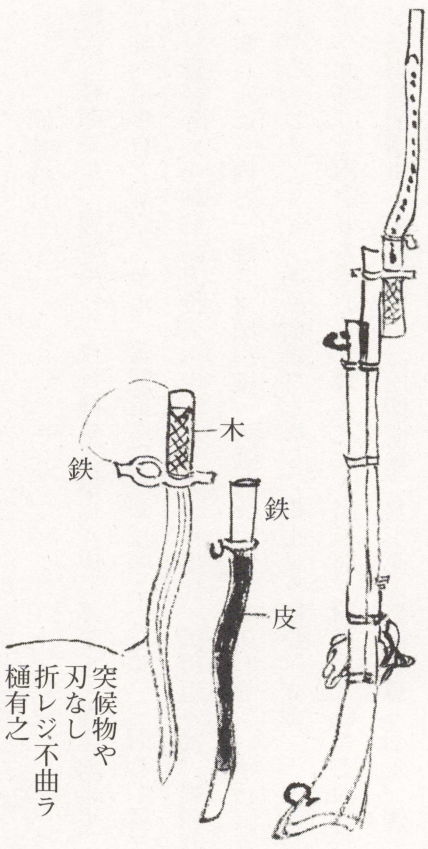
(朱書)「十三」　(朱書)「十一月十日立御飛脚廿日着廿一日達　日記斗参　書状不被添候」

同六日

曇、寒気甚、起ニ思止五ツ頃迄床中ニ居、藤助来ル、例刻出仕、寒気甚し、昼頃より雨ニ相成、今日為見馬参候積之処雨故不参、青毛ニて南部馬よし、無張合戻ル、今宵御組豆腐ニて呼、二階十九畳敷一間ニて目白押いたし、大鉢と膳椀人々持参、徳利盃も同様也、四ツ頃一同戻ル

同七日

曇、雨は晴、寒気も今日は少し暖気方、乍去(ママ)巨燵無之着物ヒヤ〳〵いたし候、丸子之ちゞ夷筒持参、至極面白、大筒打候者は釵ヲさし筒先ヲ下提、背中ニ掛置候鉄炮之由、代金十九両之由、出掛ニ付ちゞを返し御殿へ持参、御用所へ為見候処至極面白とて権十郎殿是非一挺求度と申、七十挺揃之趣ニ付、上ニて十挺御賣(カヒ)上可然、早速織人ヲ呼示談被致候得共、如何成返事候や、私は聞不申、此方ハ金不足困事、萬物面白品如山、唐物第一よし、今朝寝いたし御殿へ九ツ過詰ル

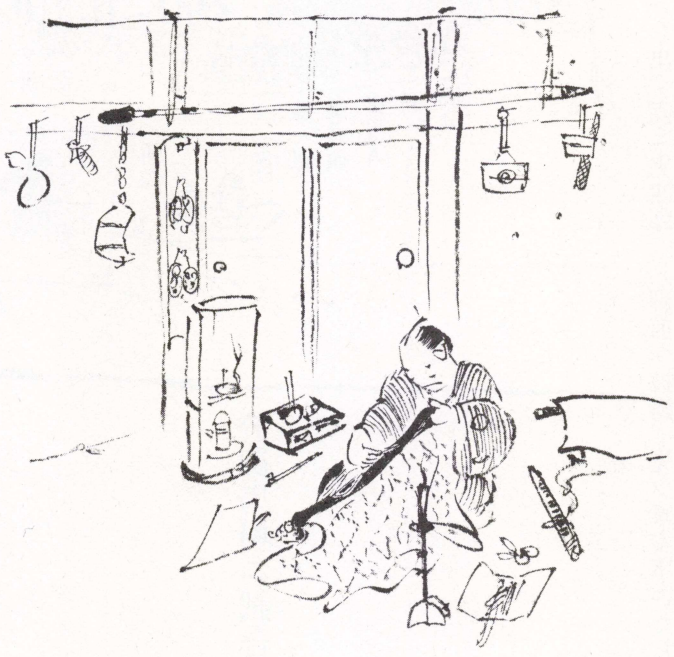


明日新徴組御覧被仰出、明後九日御縁組御取交セニ付殿中無地熨斗目、尤花色上下同色、返小紋ニ無之よふと被仰出候、返し小紋とハとんと不分、いつれも困候事也、所持いたし候者は有之、五日ニ幼力(カ)皆之困候由、此無地も如何可有之やと考なから帰、松平源大夫若党打衣(裂カ)羽織小袴着、御製(ママ)禁おかしニ付為礼候様ニとの事ニて相礼候処、入恐次第と相成候、別段之儀ニ付多兵衛叱差扣(いたしカ)□□候積ニ□(成カ)、半蔵内々案文為見候得共余り馬鹿ニあきれ、弥差扣為出候てハ庄内へ不下ハならなひ事ニ付、已来入念と此度は先ツ立腹相止、金弥来ル、仙太夫入恐候次第ニ付内意使権蔵来ル、受取、金弥も不念之筋ニて半蔵へ案文頼也、世話敷処通抜ヶ候処、指扣やら追付大目付騒ニも可相成、疑敷者足軽弥ニ極候ハヽ首飛候事故容易済申間敷、御預人之紙入之中ニ六両余有之処、何月幾日頃ニや見不申ニ付、此造酒助くひなれする事ニて大閉口至極、吟味始り候ハヽ、役人此頃庄内へ下候者幾人

や、来年迄掛可申候、馬鹿〳〵敷、罪人物盗者も有之世中と可申

○長州証伐当十八日より手合之趣、此頃大坂城ニて手配評定有之由、野州集ハ内通之為ニ落候得共、長州一国之敵容易攻ニは無之大変と可申候

○明日新徴御覧ニ付、差泥事ハ黒半襟之肌子二ツとも脈あか付とろ〳〵いたし候故、茶襟着可申処候得共、是又あか付あしく故、黒襟裏返し可然と工面出来、如図縫至極よし、漸出来明日之始末合こゝろよく床延伏し候、火事チヤン〃〃〃風も強候得共火も不見、夢中



同八日

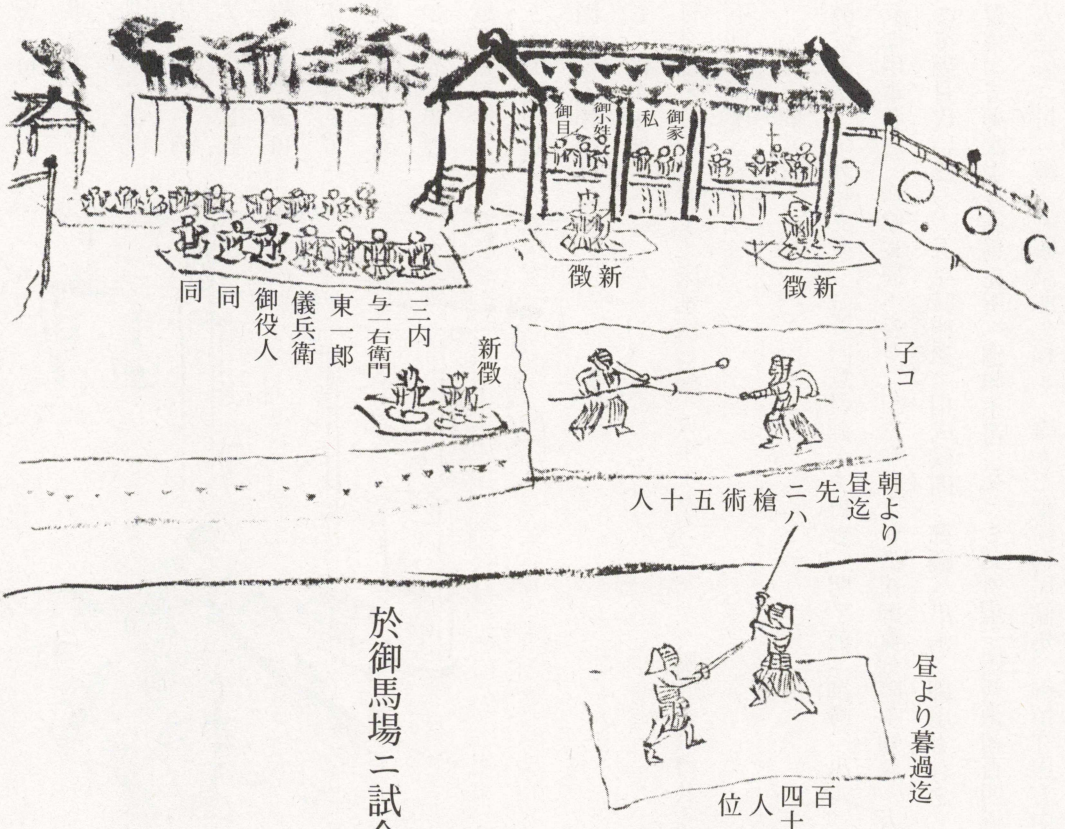
曇候天気、早天起支度、金弥内意書源大夫持参、明半前ニ御殿へ出ル、十兵衛用事有之、柳原長屋へ参ル、隼人今日之新徴組御覧刻限不知居、大騒ニて髪月代いたし、五ツ時(順転倒カ)揃過ニ相成候間、御殿へ出ル、御用も有之、御召替ニて御次より御馬見所へ廻候手筈、私とも詰所辺一円新徴組百四五十人詰候ニ付、御小姓頭詰所へ移ル、緩々た葉粉呑居候処、御留守居方中役金三郎参ル、只今御町奉行松平石見守様御手付同心参り、深川八幡前前廻船問屋ニ何屋誰と申住居二階ニ長州藩五人忍居、町人体身をやじす(やつすカ)、刀等脇へ隠し、五人之内両人は脇さし持候由、外ハ無刀ニ付早々不目立よふ御人数御出ニ相成候様、石見様より被仰付候趣、尤手配等之事深川寄所ニて御示談有之様ニ、右之廻船問屋は長州出入者之よし、右之五人便舟次第明日ニも船ニ乗候積と申注進、其内御召替(代)そら〳〵大騒ニ付即御用所走り申述、今日非常詰二十人、御物頭一組ニて可然、家を取巻候故先方より四十人位と申遣候ニ付、委細申述早々達候様被御申聞候、御備組頭御付候方と申述候処、十兵衛呼出候様ニ付早々呼出し候、権十郎殿御覧所へ廻居候間、十兵衛参候ハ、為知呉候様被申様ニと直ニ被廻候、私は跡残、御備呼只今早々支度、尤昼頃ニ相成候間食事いたし候様申付、嘸十兵衛頭可被仰付候、御留守居中役之内も出来可申、御物頭も可被仰付候と達、御備組不残捕方被遣候故、今日之宅非常私之組へ早々只今饗応之間へ相詰候様下谷へ飛田為走申候、其内御物頭非常番朝比奈十右衛門参候間、早々一組召連深川へ参候様ニと申達、其内十兵衛来候間十右衛門と相談為致、十右衛門走り引、夫より御次より御馬見所へ参り、権十郎殿へ十兵衛参候趣申述、権十郎殿と一趣戻り、夫々達、即四十人餘之御人数出候ニ付、御馬見所ニ御次より廻り篤と見物いたし候積之処、捕手遣候故甚心配落付不申、今日手疵得不申にやと心配至極、気掛なから見居候処、御次御坊主十兵衛より之手紙来、松平造酒助様榊十兵衛　開見

封

先刻被仰付候長藩五人一同不実(無事)ニ召捕候間御安堵之為一寸御注進申候、権十郎殿へも宜被仰述被下度奉存候、以上

十一月八日　榊原十兵衛

松平造酒助様



於御馬場ニ試合

権十郎殿へ其侭さし出、直ニ男四郎　御前へ披露、先ツ漸安堵いたし候、見物いたし候一同同様之趣也、昼　御居間御戻、一同外へ出平伏いたし候、八ツ頃ニも可有之、御召代ニて御馬見所へ廻り御出候節一同平伏、昼より一刀流、暮過ニ相成分不申漸相済、御餅菓子被下、権十郎殿・私・男四郎鳥渡挨拶ニ出て六ツ過ニ引、直ニ政右衛門へ為暇乞参ル、十兵衛初御人数尓今不帰、空腹ニ相成候間隼人へ寄、即膳出し、濱クリ汁ニ煮肴也、其内十右衛門帰候趣ニて届ニ出候間、捕方始末聞候処、御備組ニ階へ内之階子（梯子）よりと外より竹階子二ツ掛、三所より登入走り掛候処、伴弥太郎カラミ槍ニて髪毛カラミ候処、余人急ニセマリ、五人とも働不申召捕、金子其処々へ入、脇さし短刀七八本有之、刀三本渋紙包いたし置候処、御同心持出候由、船問屋亭主即公辺人捕候由、書物等訳山有之、早速御町奉行松平石見守様引連相渡候処十兵衛被逢誠大誉被致候由也、無間十兵衛も帰候故、急ニ非常詰為致候御組召連五ツ半過ニ下谷へ返（ママ）ル、今朝も早々起候故伏し候

同九日

雨、晴模様也、源太夫松宮　源吉事　参ル、家来事ニ付差控さし出早速帰、今日は無地熨斗目着し、羽織襠高袴ニ紺足袋ニて出仕、御用透候得共矢張少々ツヽ有之候、今日十兵衛五人御加扶持、在勤中二十人御扶持ニ相成候、松平右京亮様より御縁組御約定之御使者被取交、兵部殿掛ニ付松平様へ被出候、其後御先方よりも御家老御留守居参ル　御目通有之、其後御地走出ル、御焼物鯛一尺二三寸も有之、何之膳と可申や数々出ル、御使者開候後御用所へ御祝義申述ル、詰所〳〵ニて御酒御吸物被下、マ黒ニホラノさし身・鯛小串・ハマクリ御吸也、独故楽なから頂戴、ハマクリハ砂タラケニテ一口入、椀ニ入候

一、先月廿五日へ御誂もの書状只今達、遠着承候処、野州楯山より落候五百之残党、又々小山辺とかへ二村ニ参屯、道中通路容易之事ニ無之、荷物皆残し漸人斗登候て、廿三四日より追々立御人数滞留之噺よふニ承り、大困事ハ始候、先頃奥州へ下候由雑節有之候得共、仙台湊村蔵被取候□も有之故、国堺ニ固メ有之、浪人入事相成間敷、如何いたし候者や

と此頃考居候処、昨日又々歩兵繰出候とて足並之トンドコトン之太鼓豆炒いたし候様叩押音也、乍去楯山自国と申、米粮玉薬潤沢貯有之処、逃走候間近々ニ片付可申、庄内辺へも殊ニ寄参候事も難斗候

一、今日近々四品可被為蒙　仰ニ付、掛り隼人・権兵衛被仰付候、去年頃や当年ニや御官位被叙候節為御礼御上京可有之と申事、京都より申来候ニ付、隼人へ為御名代嘸為御登可有之、萬一我抔為御登可相成やと殊に○尓今被遣候人不知趣申聞候寄懸念なりと噺いたし居候得共、内々半蔵へ駕籠痛候処修覆等致置候様申付置候、萬々一若々被仰付候節、先達て之軍登と違、大金ハ入可申、其節気量丈借金不致ハ相成間敷、御家老之可登処ニ可有之、物入なる事、其上初て事故甚ムサク御座候、八ツ過帰、御徒目付片桐茂作呼即参ル、御用有之達、暮過迄噺いたし帰、定之進・六右衛門・権蔵用事有之来ル、五ツ過迄致噺帰候ニ付、寛々御状奉拝候

一、先月廿四日・廿五日御認之御書御飛脚遠着、今九日着相達、謹て奉拝見候、日増寒気相成候得共、益　御機嫌能被遊御座恐悦之至奉恐賀候、私無事相勤居候間、少も御懸念被成下間敷候、宗右衛門先月十六日帰着、早速御伺ニ罷出、具ニ此方模様御承知被遊候由、当人此方様子御話申上候半、鼠之逃るかことく下候半と考居候、主馬事も御聞被成候由、病気と号日々よふニ他行、子供同様我侭も言語絶候、無文字、乍去私事仕候ては同役と申、松寿院様を思ひ、草之蔭ニては如何程苦々敷思ひ可被居と捨置事も不相成、扱丈手尽可申、乍去御用相談も染々不相成程人故、蔭働ならて無之、御小姓頭と相談いたし候ニは、柳原へ居候ては誰壱人心つかいの人も居不申、得手勝手他行、御組抔ハ日々出仕被致候事と存居、御用書付等ハ朝ニ出し、ソノ書付助吉御殿ニて私へ出し、助吉引取御組へ達候故、暮頃ニ最早御殿より御引取ニ可相成と、御用伺ニ出候と尓今御引取無之趣ニて御組帰候由此頃山本権蔵参噺いたし候間　御殿へ頓と不被出他行日々いたし候由噺いたし候処、きモケいたし候ニ付、西御物見ニ引移候事ニいたし候ハヽ、御殿一足故大違ひ出可申、且御家老衆御小姓頭之前在之、御殿ニ断他行不相成、しちやう攻ニ兵部殿へ是非とも御用不便利之□近々沙汰御長屋明次第事也次第引移候様致被呉候様ニと頼置候処、早速主馬へ被申由、其後御長屋明ニ付私より引移候様老衆被申候得共、左様ニては事軽相成候て早速引移申間敷故、是非とも御紙面ニて早々引越候様御沙汰有之様ニと呉々入申候、且御扱一ツと強て申述候処、私困事先達てより覚被居候故被笑候得共、是非と申述候て、漸々御用番より紙面参候処、始末合不申、早速引移候事不相成と申居候得共、延々も不相成候や、十日十一日天気次第引移候事ニ相成候、先月廿九日欤当一日頃ニ被申遣候由、漸事成、此上ニ我儘被致候ハヽ、私知り不申、老衆も一藩の締ニも懸候間、一廉不申付相成候間敷と先達被申候間、至極御尤、不構置候てハ御為道ニ不相成義、乍去病気と号養生之為ニ他行いたし候様玄輪申候ニ付、此度ハ御引移之義一先ツ御扱被成、其後も是迄通ならハ無余義次第、今迄御用所ニて申述、以之外之不沙汰ニ付、一通貴様迄申候事故、此度貴様被申通御用も有之、遠方ニ居候ては御用弁ニ不相成候ニ付、早々引移候様可申達との挨拶被致候間、忝なしと引、和尚之為小増(僧)大心配、御察可被成下候

一、十七日政之助為看病祢津ト十八日同出、茶春裁(カ)昔少々上候由

一、宗右衛門五升入一樽被下候由、同人より酒小陶入一ツ・小箱詰茶初摘・神田自慢菓子一包さし上候由

一、中的云々漸差下安堵いたし候

一、馬之義被仰下、萬一事有之節ハ弱馬ニて甚懸念御座候、無油断尋候様四郎右衛門へ申付置候得共今日迄無之、馬は幾疋も有之候得共、用馬向壱疋も無之、此頃南部より参候青毛能馬故率参候積御座候得共、此間ハ

兎角雨天続候て尓今不参候、時々被誘行候得共馬無之とて断候故、我馬御貸可申と二疋健人より被申候得共、夫もいやニ付(芝カ)へも当五日私斗歩行ニて在之、緩々能馬求度候、隼人星青尓今直段引不申とて四郎右衛門を責居候、五十五両を三十両ニ付ケ、ハネカヘリ四十両位と申遣候得共、挨拶不参趣、榊原へ集兎角馬嘶御座候

一、主馬軍用金貯嘸可有之、鉢植又は時計抔無闇(ヤミ)ニ集候由、長者別段御知行も不思(カ)大気量人と可申

一、勝兵衛急(カ)事五日下十八日着、色々さし上候由、鮭壱本被遣候由

一、持登候タヲヒ文化頃之分之由、此頃馬具師承候処綿入タヲヒ之寸尺ニて袷ニ相成候故、目立大振りと申聞候ニ付、袷寸尺ニ直候様申付候

一、三尺革之事被仰下、此方ハ御旗本衆初一同用ひ居候風ニ御座候、用便ハ如何ニも鎌差縄相用ひ居候得共、是ハとんと見当り不申候(ニ付)

一、黄色之敷込之事、萬一御入落ニ候やと考申上候、此方ニて一ツ申付新敷いたし仕舞置候間、二通ニ相成ニ付さ様思召可被成下候

一、不用下候皮肩衣之事不申上候由、嘸々申上落候半と存候

一、酒田云々委細被仰下馬鹿〳〵敷事ニ御座候、中村ニて娘貰候由、此娘大利居者之由、七兵衛かゝをもやり込候程、女角力之取込来春之番附ニは如何可有之やと、十兵衛抔大返笑いたし居候

一、又吉・要吉小大男御広間陳太郎の大若党、誠鶏飛廻候節、縄率不仕ハアフナキよふニ御座候、近々子供力出候よふなる甘物さし下可申、喜三郎宜、悦左衛門悦居候由、於私大安堵御座候、石太郎又々上候様申上候由、此方いつれも呵居て御長屋ニ気詰居候

一、とも弥入湯無事帰湯之よし、如何程気つかい、鼠之ことく角ニかたまり居候処は見へ候よふニ御座候、近キ所ならハ見舞も遣候所なれとも心之儘ニも相成兼候、腹合悪敷所私居候物見一目為見候ハヽ直リ可申、美人や馬鹿や異類異形者引も不切通候、此頃出腰向ヒ御旗本有之、馬三疋も建置候故千石余家ならん、門前女ニて気違候事此頃毎昼夜参候、離縁ニもいたし候者、利吉さんおそのさん〳〵〳〵と大声ニて呼、アクタヒ絶言語、中間体之者出、追候得共中々不帰、門前伏候て柱石之(カ)クジル迄も参ル、気カナヒヨ、おそのさんイテサンセデサンセと其声耳ヲクへ居候、其内ニ紫縮緬ニて頭ヲ包、真白鼻ヲ出、縞縮緬之袖長羽織と可申や半天やと申や真黒ノヒロウト掛、帯紫大瀧縞ニ黒と昼夜ヲフラリとワッサト〆袷ノ裾よふ小吹小紋形ニ小サキ紋抔付、足袋不用あした草り(足駄)付黒ヒロウトノ緒ヲ付カラリ〳〵、裾ハヒルシヤラ袖サ□〳〵とツン〳〵歩行、其内ニ奇妙□者も通り実ニ為見度事山々存居候得共、金丸不持無拠しと独楽居候

一、傳吉凧他事無之趣被仰越丈夫故と悦居候、整差下度候得共、御覧等有之、政右衛門と御殿ニて鳥渡暇乞いたし候のみニて下兼候、文次も少々ツヽ、歩行仕候由、十月幾日頃生候哉忘候得共、丈夫なる生と可申、弓矢多アカ丈夫御座候由、嘸々御賑々敷可有之、遠察罷在候

一、廿二日閑兵衛帰着、具ニ此表之模様申上候由、被仰下趣奉畏候

一、輝廣之義申上も甚無レ心よふと思召と存候得共、一通り抔居、又二重抔ニ相成候て苦ヶ間敷申上候、色々心変申上候得共、順策之心をむにいたし候も不宜と存、一段腹立候よふニ御座候得共、是も私之悪敷よりとかんにん仕候へハ順策之心も通り、私之先ニ噺いたし候事出来候間、此頃心直し候、尚又申遣候筈、順策嘸申上候半と存居候、良平十二月罷登候節、下地出来為御登ニ相成候ハヽ大慶仕候、其頃ニ相成候ハヽ道中浪人散し可申候

一、御馬乗四郎右衛門事先立申上候節何ヶ年と申事不申上筈と覚候得共、二年詰と被仰越候、私間敷□申上候半、一ヶ年詰いたし候、乍去只今聢

不分候

一、菅河原鮭味噌糟漬二本・小鯛七枚為御登被成下、男四郎へ云々被仰下奉畏候、鮭嘸結構可有之、大楽先々有難仕合、何分の州（野）之浪人野郎ニ掛甘物不着愁とも無全、早々着候よふニと祈居候

一、抱地へ御入云々具ニ被仰下奉承知候、誠御心痛程奉察上候、急之事ニて別て御心配被遊候半、先ツ萬事首尾能相済奉恐悦候、上物品々迄至極御宜嘸御満悦ニ被為在候半と遠察仕候

一、母上様より御状有難奉拝候、御機嫌能被遊御座候、恐悦奉存候、私事前文之通故御休意可被成候、甘物沢山為御登被下由有難奉存候、何分野郎共ニ掛り、私とも迄難義仕候、早々皆殺ニ仕度事ニ御座候、子供嘸々賑々敷可思召候、傳吉へ凧下候筈、続凧此方ニて之揚□為挌候処不知、今日定之進参リ挌よふ甚残念仕候間、小サキ続凧追て又々下申度、鳶凧漸出候間、先整候て下候事出来候ハヽ下可申候、凧絵近々参候て整下可申、扨着服委細被仰下有難し、福井との御手細工紺足袋田舎仕立ニて、とんと目□明不申、紺皆落セツ駄緒付候、皆切レ四五日ニて下メツタニ成申候、半道往来故と存、キツヽヒ整用候処足ニキツハリと添能、紺不落、十五六日洗も不申用ひ、切目も不立直段ニ本余之由格別ニ御座候、一枚物道中より寝まきいたし洗不申、只今も着居候、猪との不居斗垢トロ〳〵、権蔵参り為洗レとて大世話ニ御座候、天気能ハ三平掛可申、足袋と是ハ中間とも洗セ仕事いたし居候、肌子日々御殿詰黒襟斗垢溜りコボ〳〵爪ニ掛り□間此頃裏返いたし候、黒紋付裾襠高ノ襠□中程切レ申候、下着ハ小紋形ノ黒襟掛分斗着、下着抔ハ如山貯潤沢ニ御座候、御長屋ニ居候時ハ餅草色之御紋付ニ昼夜無差別、道中より召候一枚物ニ、縞之綿入寝まき、モノクサ太郎参候ても入恥候て帰候程ニ可有之、唯道楽者困事ハサクジ掛候ニフカシ無之、腕フチ居候間能便りニ御登セ可被下候、乍去此方ニ可有之も難斗候間、次第能覚候者を御糺之上被下度候、火熨斗等具ニ奉畏候

一、干味噌先ツ御止可被下候、在過候て此頃人々へ配分仕候

一、持参より（カ）小鯛為登呉候、是も同しく野郎ともの為ニ達不申候得共、御風味御礼追て可申上候得共、御心之程乍恐宜御礼奉御願候、祖母様も此節嘸御丈夫可被為在と奉存候、御序宜奉願候

一、石沢民（カ）も嘸々御無事ニ被下着□遠察罷在候、登候節真綿御□□いたし候積之処、丸子ニ何ニも持不登、三両へ添遣候、何ニも不送却て甘物貰候、甚敷失礼無慎仕候事忘不申、追て何廉下度と奉存候

一、此頃岡吉甘物食との百万石も取よふの顔いたし居候間御吟味いたし候、手ニ指股ニ種（腫）物有之故是又御吟味いたし、追々可相糺候、兎角おろしき昔語り居候、御一笑可被成下候

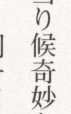
三両通之御答委細ニ難申尽候、先々寒気御凌可被遊候、御答旁御機嫌奉伺候、尚奉期幸便之時候、以上

十一月九日夜認　　松平造酒助

御父上様

御母上様　御答

尚々明日立候飛脚有之ニ付□□近々他行いたし、蒸気船一覧ニ両老衆・男四郎抔参候積、隼人を留守番任候積之手配、主馬番人も不相成□子供同様故当ニいたし不申、十二日頃ニ可相成候、追々保養いたし不申ハ造酒助も庄内下候ても噺も出来不申、噺実挌ひ可申、茶屋抔ハ堅禁不申ハ御組御備の締ニ不相成候間少も御懸念被下間敷候、吉原や深川仮宅抔へ参り、酒呑候へハ即御注進〳〵と申参候へハ、捕方今や〳〵と待居候故、楽も出来不申、此前御登候頃と大相違、御備方ニて組製（ママ）し居候風御座候、先々能々辛

抱いたし能馬を求、人之馬ニて参候処へ一趣参、萬一之節先陳(陣)被掛(駈)候馬を求候ハヽ、嘸々嬉からんと待遠御座候、名馬求候ハヽ、如何程楽ならん、昼夜忘候心無之、折角〳〵寒気御厭可被遊候、皆々へも宜奉願候、此頃申上候名下注文物之事かゝと子供を書不申書落候、弓矢多へ遣候品ハ考居候、此頃見当り候奇妙なる下駄　  　小指も出申間敷見候

同十日

晴天、丸子ぢゝ参ル、五ツ過三内用事有之、柳原へ寄、主馬今日御上屋敷へ引移候届有之、例刻出仕、御用とんと無之、道中筋大騒之由、下候人々嘸噺可仕候、寒気折角御厭可被遊候、尚奉期幸便之時候、以上

十一月十日　柳原ニて　松平造酒助

御父上様

御母上様

尚々品物尓今達不申候得共、白久より小鯛被為登候由、書状返事ハ追て遣候度候間、乍恐宜御噺可被成下候、以上

大落字大乱筆不文御免可被成下候

【第十三冊終】

解題にかえて

今回は翻刻したのは元治元年十月朔日から同十一月十日まで。これまで長州征伐発令への対応以外は比較的平穏であった造酒助周辺は事件が続き、俄かに騒がしくなっている。

まず江戸市中取締役に関わる事件が相次ぐ。牛込御門近辺での辻斬の出没、そば屋で酒に酔った会津藩士の抜刀騒動、吉原での捕物等が続く。そのなかで十月十七日の水戸浪士二名（水戸天狗党の関係者）の捕縛では激しい抵抗にあって藩士六名が負傷（一人は「頭蓋骨ソゲトレ」る程の深手）、藩邸は大騒ぎとなり、造酒助もその対応に奔走する。十一月八日には深川に潜伏する長州藩士五人の捕縛に藩士四十人余が出動、全員を生捕にしている。こうした市中取締により庄内藩の評判が高まっていると造酒助は記す。

水戸では天狗党が拠点とした那珂湊の攻防が最終段階を迎えており、藩士六人が情報収集に派遣された。造酒助は彼らから緊迫した戦闘の様子を聞くが、同時に寄合所帯である幕府軍の士気の低さや軍紀の弛緩も伝えられ「此方の風聞とは大相違」と記す（十月七～十日）。九十六頁は「戦場」の見取り図で、現地に派遣された藩士から聞き取ったものであろう。画面右側の「川」は那珂川。中央の「楯山」は現ひたちなか市館山（たてやま）、その右側の「峯山」は同峰後（みねうしろ）近辺と推定される。また楯山の右上に見える「ハンシヤろ」は水戸藩が安政年間に建築した反射炉のことで、この戦いで焼失崩壊した。

造酒助は洋式銃器にも興味を示す。日記には「丸子の親父」という人物が度々登場し、五連発式の短筒（九十八頁）や「夷筒」（銃剣付き小銃・百十頁）を造酒助の元に持ち込んでいる。この時には藩が夷筒十挺を買上ているが、後の日記をみると造酒助も小銃や短筒を入手していることがわかる。同僚の竹内主馬が病気と称して仕事をせず、諸事件のため業務量が増えたことをかこちつつ、市中で見聞きしたこと、日々の食事の事など、相変わらず様々な日常些事を書き綴っている。

本日記が庄内の家族への近況報告的性格を持つため、前後脈絡なく急に話が変わり意味がくみ取りにくい所もある。また「征伐」「沢山」は一貫して「証伐」「訳山」と記している。

なお文中には人権上不適切な表現もあるが歴史史料としてそのまま翻刻した。